別記様式(第5条関係)

会 議 録

会 議 の 名 称	令和2年度 第1回総合教育会議	
開 催 日 時	令和2年7月30日(木)	午前10時30分から 午後 1時15分まで
開 催 場 所	市立図書館2階 研修室	
委 員 名	(1) 出席委員 原崎市長、柴田教育長、藤井委員、 青木委員、半澤委員、今村委員 (2) 欠席委員 なし	
所 管 課 職 員 職 氏 名	松田副市長、本郷総務部長、榊まちづくり推進室参事、榊教育部長、長野都市整備部長、永島郷育推進課長、堀田文化財課長、水上学校教育課長、宮原教育総務課長、永松主幹兼指導主事、藤岡指導主事兼教育指導係長、伊澤指導主事兼教育指導係長、笹田総務企画係長	
会 議	議 題 (内 容)	「新設校について」
	公開・非公開の別	☒ 公開 ☐ 非公開 ☐ 一部公開
	非 公 開 の 理 由	
	傍 聴 者 の 数	70 名
	資 料 の 名 称	
会 議 録 の 作 成 方 針	☐ 録音テープを使用した全文記録	
	☒ 録音テープを使用した要点記録	
	☐ 要点記録	
会 議 録 署 名 委 員		
そ の 他 の 必 要 事 項		

1 開会の宣言

榊参事：皆様おはようございます。

総合教育会議の開会に先立ちまして、傍聴者の皆様に御案内します。本日はたくさんの傍聴のお申し込みをいただきありがとうございます。少しでもたくさんの方に傍聴いただけるよう、会議会場とは別に、傍聴会場を設けさせていただいております。会議の構成委員の皆様も傍聴について御了承ください。

なお本日の会議は、福津市教育委員会会議傍聴人規則の規定に基づき、私語や賛否表明などの声を発する行為、拍手などの音を出す行為はお控えください。また、会議の様子の録画、録音、撮影もお断りいたします。守っていただけない場合は退出をお願いすることもありますので御了承ください。

それでは、ただいまより令和2年度第1回福津市総合教育会議を開会いたします。

私は本日の進行を務めます、まちづくり推進室の榊でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

本日の会議は、御手元にお配りしております、会議次第に沿って進めてまいります。

2 挨拶

榊参事：まず初めに、原崎市長、御挨拶をお願いいたします。

市長：皆様、こんにちは。福津市長の原崎でございます。

今年度、最初の総合教育会議になります。前回は1月の下旬に開催されまして、それからおよそ半年が、この総合教育会議というものは、年に3回開かれております。地方教育行政の組織及び運営に関する法律に平成26年度改正、平成27年に施行いたしました、地方教育行政、そして及び運営に関する法律の中で、新たな容認された会議です。教育行政をしっかりと担っていただいております教育委員会並びに、市長のほうがり当該市の重要な教育施策、事業につきまして、同じテーブルについて、本音でいろんな意見交換や協議を行う会議となっております。

前回の1月の総合教育会議でも、この今喫緊の、本当に喫緊の課題であります、そして、急がれるこの児童数が増えています、この新設校の建設についてを議題とさせていただきましたけども、この総合教育会議、私がこの議長を務め、私が招集する会議でございます。あれから半年たちまして、その後も議会もありましたし、内部でも私のほうで、教育委員会事務局である教育部のほうと、教育長も含めて協議してまいりまして、

もう2月も3月も4月も、それぞれのこのポイントで変わってきたところ、また、変わらないところもございます。そういう経過も踏まえて、今日の会議があるものと考えております。

3 協議 「新設校について」

市長：早速ではございますけれども、この協議のほうに入らせていただきたいと思いますと思いますが、今日は事前に配付した資料もございません。

榊参事：すみません、それでは、協議に入る前によろしいでしょうか、本日の協議日程ですが、配付資料を御覧いただきたいと思っております。

前回の令和元年度第3回会議と同じく、現在の本市における喫緊の課題である「新設校について」をテーマに、市長と教育委員の皆様、教育長に協議をしていただきたいと思いますと考えております。

なお、新型コロナウイルス感染予防の観点からも、会議は長時間とならないよう、1時間30分をめぐりに予定しておりますので、よろしくお願いいたします。

会議参加メンバーは、次第及び席次表のとおりでございます。

事務局を含め、市執行部にはお願いですが、最初に発言される際に、所属部署と御名前を言ってください。

ただ、今日は傍聴会場に声が届くようにマイクを使つての発言をお願いいたします。

では、ここから先は市長の進行でお願いいたします。

市長：すみません、改めまして、冒頭の挨拶でした。

それでは改めまして、私のほうで議事進行、議長のほう務めさせていただきます。よろしくお願いいたします。

繰り返しになりますが、本年度第1回の総合教育会議でございます。平成27年度より平成29年度までは、福津市総合計画のその後の検証や、福津市教育大綱の策定についての審議を行ってまいりました。平成29年度末に策定した福津市教育大綱では、「福津を愛し、人との関りを大切にして、未来に向けて学び続ける人づくり・まちづくり」を基本理念といたしまして、九つの基本目標を掲げております。この九つの基本目標について平成29年度の第3回から、前年度平成31年度第1回の会議までにおいて、一つまたは二つのテーマを選択して協議を行い、前年度第2回の会議では、教職員の働き方改革についてをテーマに協議を行いました。前年度第3回の会議では、「新設校について」をテーマに協議を行いました。今年度第1回の本日の会議も前回と同じく「新設校について」、教育委員会の皆様と協議を行いたいと思っております。

現在本市では、地域に偏りはございますけども、人口の増加に伴って、児童生徒数が急増している校区があり、そのことへの対応は市の喫緊の課題となっております。義務教育の環境を整えることは市の責務であり、教育活動に必要な教職員、教室、特別教室、備品等の確保だけでなく、子どもたちの教育にとってどのようにするのが一番よいのか、このことについて考える必要がございます。

教育委員の皆様にも、ずっと議論を重ねていただいていることと存じます。

本日改めて、子どもたちが生き生きと学ぶための教育環境をどのように確保し、どのように進めていくべきか、このことについて教育長や、教育委員の皆様と一緒に協議、意見交換を行ってまいります。

それでは、今日は市長である私の思いについて述べさせていただきますことになっております。

この経緯でございますけれども、前回のこの平成31年度、令和元年度の第3回の会議、1月に行いました。ここでも、「新設校について」がテーマでありました。その際も、方針として庁議の中で決定したこの竹尾緑地に5-4制の中学校を配置する案、並びに庁議の中で検討してきたその他の案の資料を、委員の皆様にもお配りして、そこで様々な御意見のほうをいただいたわけでございます。その中で、今でも覚えておりますけれども、冒頭それぞれの御意見の中でも本当に小学校では、運動会が本当に校庭で全員保護者もそろって行えない。また、毎日の小学生の校庭での、学年によって分けられていて、本当に困難な状況。一日も早くこの校庭で子どもたちが目を輝かせて走り回れる、そういう環境にしていくには、一刻も早く、この新設校の方針というものが必要であると考えますということ、委員の藤井さんと半澤さんに述べられて、私もその思いですということ、これを述べさせていただいたという思いがします。

その中で、主に竹尾緑地の案について様々な意見質問と、私もその中でまだ予算措置するかどうかというのが、予算が挙げない方向で、私は当時は考えておりましたので、そのその心の一旦の苦渋の思いを、運動場が狭いであったり、ここであっても今現在2つの小学校のこの児童数の増加が止められるわけではないんだとか、そういうことを述べさせていただいておりました。

その前回の総合教育会議の後に3月議会も経まして、もともと手光地区というところを検討して、その1月の総合教育会議の中で小中一貫校が100億というふうに出ておりましたけども、この竹尾緑地に中学校を設置する場合も、12月に同時に庁議の中で中期財政見通しというものをやっていたんです。そ

れで、学校をつくるからには、その財源を捻出しなければいけないと、その財源の捻出の中で、やはりこの公共施設の中で、本当にこの老朽化が進み、倒せるものはスクラップですね、そういうその中期財政見通しを組みました。その中で、この手光わかたけ広場、その中央公民館も、その学校建設する財源捻出のためにスクラップしなきゃいけない案ということで、これがその1月の全議員さん、行政報告の中の、この全員協議会という場で、中央公民館はなくすということを、中期財政見通しの中で、学校建設を前提に説明させていただいたところです。

もともと私の頭の中に候補地として手光があるということは考えておりましたけども、この8月以降始まりますこの候補地というのは、当初より教育部のほうから、竹尾緑地の案だったんですけど、手光もその途中で検討してはということなら検討してくださいということだったけど、中央公民館というところが、候補地にはなっていないということが判断されました。

そして、本当にコンサルタントさんのほうに、調査しているかどうかということが判明したのが、この3月の17日でありましたけども今年の、改めて3月17日、そして、4月の1日の、このコンサルタントさんとの協議の中で、私のほうからお願い事項として中央公民館、わかたけ広場の土地を活用並びに使えるものならば、その建物も有効活用して、小学校、もしくは小中学校、実は中学校ということもですね、そういう調査をしてくださいと、調査はそこはされていないようでございますのでということでお願いして、4月にその事業費も含めて挙がってまいりました。

それで、これは事業費のしっかり出たところで、この地はこの地で、中央公民館わかたけ広場に小学校を設置する場合、こういうデメリットも考えられれば、こういうメリットもたくさん考えられるのではないかというような思いを書きまして、それを4月の27日に協議の中で教育長を始め、この教育部の部長、課長、教育指導主事にもお配りしたんです。

それで、このいわゆる代替案といわれているものです。この代替案を教育部の中で、教育委員さんにも配られたと思いますが、代替案を検討していただいたものだと思います。今年の5月の13日に、もう一度教育長を含んだところの教育部の職員の皆様と、この代替案についての私の思いを述べさせていただき、ここもしっかり検討していただきたいと、私の思いの中では、教育委員会、定例のこの教育委員さんの中で協議いただいて、そして、その竹尾緑地案とこの比較検討の上で協議いただきたいと、並びに5月13日の時点でも、私としては内部的に特に教育長そして教育部長、教育部の職員とこの中央公民館わかたけ広場に小学校を新設した場合のその可能性というか、協議を進めていくつもりでございましたけども、その後庁議

もありましたし、5月13日が協議、5月21日のこの教育委員会の中で、この代替案が取り上げられまして、そこが協議されたようでございます。詳しく会議録は見えていないんですが、その中で代替案は検討したけれども、やはり予算までも出ているけども、やはり教育委員会としては、この場合の教育委員会というのは、この今日御出席の教育委員の皆様でございます。教育委員会として、やはり竹尾緑地に小中一貫、5-4制の中学校を配置する。ここに早急にやはり、子どもたちのために早く学校を建設する必要があると、令和6年には福間中学校が教室が足りなくなるということで、竹尾緑地にその学校を新設するための予算措置をしてくださいという申出書が出されたわけでありましてけれども、ここも私は正直びっくりしたんですけど、これについては回答を述べさせていただきました。

ただ、今日1月以来本当に、委員の皆様とは、教育長以外とは久しぶりにお会いしますし、この代替案について御検討いただいたと、それゆえのこのたびの5月21日の申出書であったとは思いますが、この想いを今日はこのその代替案について、私としては、しっかり今後定例の教育委員会の事務局の教育部もでございますけど、やはりこの独立した行政執行機関、市長部局とは独立した行政執行機関は教育委員であると、この教育委員会、最終的にはこの市長部局の政策の責任、予算上の責任は私が負っておりますが、予算はもっていなくても、この教育施策については、教育委員の皆様がこの合議制であるこの教育委員の皆様でしっかり協議いただいた上でのこの教育施策の推進であると思っている中、しっかりと私の代替案についても、今後定例の教育委員会の中で、そして、この総合教育会議もいつでも私が招集、皆さん御了解いただきますと開催されることになっておりますので、この総合教育会議は定例の教育委員会の中で御協議賜りたいという思いがございますので、そういう中でこの今日の代替案をちょっと御説明いただく時間をいただいております。その説明の後に皆様から御質問を承り、今後のこの総合教育会議につなげていきたいと思っております。

前置きが少し長くなりましたが、本当は前置きはもっともっと私も話したいところ実はございますけども、この総合教育会議では、そういう思いでこれからこの中央公民館、手光わかたけ広場を利用した小学校の配置についての御説明をさせていただきます。

それでは始めさせていただきます。今日配付いたしましたこの青色の資料でございます。

学校を配置する上で、これを順を追って説明させていただきます。

この4月27日に配付したその新設学校建設に寄せてと、ほぼ、思いは、ほぼというか、全く同じでございます。並びに7

月17日この私のフェイスブックであつたり、市の公式のホームページの中での市長日記の中でも、新聞報道も経まして、それへの見解ということで公表しておりますこのことを少し簡略化させていただいておりますが、この資料でもって説明させていただきたいと思ひます。

まず、学校をつくるならば、1枚めくっていただきまして、より確実に安全な場所にとつて思ひがございます。ページは振つておりませんが、この2枚目ですね、学校をつくるなら確実に安全な場所にと、この竹尾緑地案並びに手光わかたけ案と申させていただきます。ここに竹尾緑地案では、奥には約2万トンのため池があるとか、帯水層があり軟弱な地盤と、そして、今後大きな構造物であります学校が配置されますと、この地下の湧水が周辺に家も立ち並んでおりますが、こういうところに噴出する、一部噴出しているところも実はあるんですけどもね、そういう可能性が高いと、そういうことを書いておりますが、これについても教育委員会のほうは、今現在ホームページのほうで安全性についての見解も出されておりますから、そこについては、この後の質疑応答でと思ひますけれども、私はこの竹尾緑地の場所並びにこの中央公民館のわかたけ広場を利用したこの手光わかたけ案を比較した場合、より市民の皆様にもしつかり御納得、御理解いただける安全な場所ということでは、この手光わかたけの地のほうが、議会市民の皆様にも御理解しやすい、御理解いただく可能性が高い場所だと思ひています。手光わかたけ案は既に御承知のように中央公民館も設置してございまして、裏のわかたけ広場駐車場と、ここはもう既に公共施設が建つておりますけれども、中で、しかも高い位置にございまして、地盤が固く土台が安定し、そして、この場所であれば、いざ災害があつた場合、水害や津波等も想定されましても、防災の拠点にもなるということで、確実に安全な場所を比較した場合、手光わかたけ案のほうが安全ではないかと、確実に、と思ひております。

次に、まためくっていただきたいと思ひます。

事業費の増大が「とても」ですね、赤字で書いてありますが、これは私の思ひの中を反映したものだと思ひていただいて結構でございます。竹尾緑地案は総事業費55億円。そして、手光わかたけ案は4月のコンサルさんをお願いした中で幾つかのパターンがあつたんですけども、ここに小学校を設置した場合46億円という事業費、作成費等も含む事業費が出ております。そして、この額の比較だけでも、これは教育委員会さんからの5月21日の申出書の中にももううたつてありましたが、手光わかたけ案は、代替案は46億円と、竹尾緑地案には55億円。既にその中でも明確にうたわれておりましたが、この額だけを見ても財政をこのしつかりつかさどると言ひますか、こ

れだけでは学校の配置の場所は決められるものではありませんが、こういう額が出ている中で、私が懸念いたしますのは、この55億円というのが事業費見込まれています竹尾緑地案のほうが本当に55億円ですむのかということです。これは、皆様からいただいた申出書の回答の中でも述べさせていただきました。申出書をいただきましたので早急に市長部局としてこの安全性を担保される並びに給食センターのことも書きましたが、それはおいておきまして、この55億円の事業費が確実なのか、またその学校設置において、厳密な意味では、その教育費として、教育部教育費では、見れないこの費用を考えられる中、想定される中、そこもしっかり担保しないと私は学校の配置はできないと思っているので、その辺のところも含めてこの事業費の精査が必要ということで、現段階でも先ほどまでも総務部長や、都市整備部長と協議しておりましたけど、この55億円についての精査は今後行っていく所存でございますけども、こういう懸念があるということです。

地盤改良、それから、埋立て、中を走っております井尻川の整備、この工事が始まる中で次々に追加費用が膨張する可能性があるのではないかと、この蓋然性におきかしても、竹尾緑地案と手光わかたけ案を比較した場合、より確実なのは、手光わかたけ案の、現段階でこのコンサルさんに試算してもらったこの事業費は、より確実性が高いのは、この手光わかたけ案ではないかと思えます。

竹尾緑地案の最後に、周辺地域にここに本当にふつうの戸建の住宅や商店ではなく、大きなこの重さを伴いますこのRC構造の建造物が配置されるわけです。その場合、本当にこの周辺地域にここはもともと湿地で帯水層もあるということなので、周りの環境にも影響が出る可能性がある中、そこは一つのリスクであります。

そういった場合に、ここに学校を設置するのは市でありますので、そういった場合のその補償の問題とか、そんなところもしっかり見ていかないといけないと、いつまでも見ていくわけにはいきませんが、その市長部局のほうで見れる範囲を、9月から始まります9月の議会のほうでも一部必要なものを予算化させていただいて、例えば土壌調査であったり、ため池のところであったり、こういうところは申出書を教育委員会からいただきましたので、市長部局で可能な範囲予算化して調査する、そういうことも今考えている中で、それを考えているのは、しっかりと総事業費を見たいという思いです。現段階では、そういうふうに懸念がされるということで、この2つを比較いたしまして、述べさせていただきました。

次のページ。

学校どっちが早くできるかということです。

この今でも本当に私は皆様と同じで、一刻も早くこの目に見えて、子どもたち、その子どもたちを育てる保護者、または現場の先生が感覚で思われている、その定義上の大規模校、過大規模校、そういうのもありますけども、本当にこの校舎の手狭さであったり、運動場の広さであったり、そして、現段階でも私の認識は間違っていないと思いますが、現段階ではやはり中学校よりもこの小学校がですね、特に福間南小学校、福間小学校、本当にますます大変になってきているわけです。その中で1つ学校をつくるとして、この中で竹尾緑地案と、私が提案お願いをしております手光わかたけ案があるんですけども、どちらのほうで早くできるかという点でいきますと、これも竹尾緑地案も一応4年というふうに教育委員会のホームページでは多分なっていると思うんですけども、私はここも先ほどの前のページの事業費の増大が懸念されると言ったところも含めて、4年でできない可能性もあるのではないかと私の中では思っている。そして、手光わかたけ案のほうであれば、これもとにかく皆さん福津市民でありますから分かれると思いますが、そこに公共施設が建っております。その市街化調整区域にもなっておりますけども、公共施設が建ってる中で、しかも学校教育施設ですので、ここは用途変更等の手続も必要であったとしても、既に造成にはそんなに時間を要さない。私の中で単純に造成に1年、建築に2年ということで、3年あれば手光わかたけのところは小学校を建てるのは可能ではないかと思っています。今が令和2年度なので、令和3年、4年、5年、つまり令和5年度中のうちに、つまり今からであっても令和6年の4月、ここは中学校の教室数の増加が令和6年でありますけども、少なくとも早ければしっかりスピード感は重要だけでも、しっかり見極めないといけないという中、一方では一日も早くというこの思いも私もありますので、そういったことが可能なのは、この早く学校ができるというこれだけの視点で見た場合、手光わかたけ案のがよりスムーズに、早く、学校が建設できるのは可能ではないかと、そういう比較でございます。

それから、次のページ。

小中学校の過大規模の解消にということですが。ここにはまちづくり推進室が昨年5月に策定した人口推計、これは学校をつくるといった場合に検討していただくということで、教育部のほうにデータをお渡ししまして、この各小学校別に児童数の増加、生徒数の増加を試算していただいた数字があります。今日お配りの資料の中にも出ていると思うんですが、こういった場合その竹尾緑地に5-4制の中学校を配置した場合と、手光わかたけの地に小学校を配置した場合の、福間小学校と、福間南小学校と、福間中学校の今後の児童数の増加を見ております。福間小学校と福間南小学校については、ほぼ変わらない数

字でございます。手光わかたけ案のほうが、まあほぼ変わらないといたしましょう。ただここで留意しなければいけないのは、竹尾緑地案では、小学校1年生から5年生の児童数であります。手光わかたけ案のほうでは、福間小、南小ともに1年生から6年生までの総児童数であります。何も学校を本当に設置しない場合は、福間小は令和10年で1,850人、南小で1,682人で、本当に想像するだけでもちょっと、想像できないようなそういう過密化、過大規模校というか、もう過密化が進行するという中でこの比較であります。

そして、福間中学校ですね、福間中学校は竹尾緑地に中学校を設置した場合は、中学校が設置されますので、このように、これは令和13年ですけども、何もしない場合はこの1,811人になるのが、この竹尾緑地に設置いたしますと、ここは6年生も含まれていると思いますけどね逆に、1,295人と。

そして、手光わかたけに小学校を設置した場合、福間中学校は1,632人とそういう数値、それで、ここは比較をしていただきたいと思いました。過大規模校の解消にはいずれも緩和の方向には進むんだけど、定義上の過大規模校は解消にはならないことは分かっているながら解消にと書いてあるのは、少なくともこの緩和に進み、それで、竹尾緑地に中学校を設置するか、手光わかたけに小学校を設置するかということ、これを教育委員の皆様にも今後検討していただきたいということなんです。

次にページを開いていただきまして、ここは福間南小学校の保護者より、フェイスブックにも今日お配りのこの新学校建設問題についての見解、ホームページの市長日記のほうにも挙げた中で様々な御意見をいただくようになりました。これはよかったですと思っております。新聞等で報じられまして、その中で新聞記者さんが見た、その今の本市の学校建設の課題ですよ、ね、「教委案を市長が凍結、24年開校予定 大幅に遅れ」という見出しが入ったのが6月28日ですけど、その中でも私のコメントがなかったんですけど、議会の答弁は、その代替案ということで手光に中学校の建設を提案しているということが確か書いてあったけど、まあそこも正確ではなく、小学校なんですけど、そういう新聞で報じられたことで、より、しかも内部的には申出書をいただいて回答も出し、6月議会でも述べた中で、いよいよ新聞に報じられたことで、市長が今どういう考えを持っているのか、教育部並びに教育委員さんとどういう協議を重ねているのか、その中で今このようなことがどうして起こっているのか、そういうことでありますので、私はその現段階ではもう私の考えを述べるべきだということで、公開したわけですよ。そこで本当に多くの御意見が、メールやフェイスブックや来たわけですが、その中でちょっと1つ紹介させ

ていただきたい。南小学校の保護者です。「私にも子どもがおり、日蔭野ですので新中学校を楽しみにしていたようです。ただ、子どもは箱より仲間だと思えます。校舎がどんなに古かろうと、狭かろうと、どうであれ、いい思い出がたくさんできると思えます。」本当にたくさんの中で一部、しかもこれ選んだというのも、いろいろ意味するところがあるんですけども、しかもこの後私はできるだけこう対話で、このメールであっても、御手紙であってもやっております。公開の場ではないところでですね。日蔭野のある保護者ですよね、新中学校、これは竹尾緑地のことでありましょう。楽しみにしていたと、この後のやり取りの中で、ただ自分はその学校が竹尾緑地が絶対よいとは思わないし、ただ、しかもここで赤字でちょっと抜いておりますが、「箱より仲間」だと思えますということがあります。これを紹介させていただいたのは、子どもたちにとって私のこの案は、いわゆる校区再編等も伴ったり、進学する中学校が3つに分かれるというそういう環境の変化、子どもにとってのね、あります。また、教育を行う先生サイド、教育委員会サイドでは、例えば教育のやりにくさとかもあるかもしれません。ただ、この保護者の思いもやっぱり「箱より仲間」と書いていますし、新中学校を楽しみに、これは日蔭野なので、竹尾緑地の中学校でしょうけど、福間小学校校区であっても間もなく旧校舎が取り壊され、新設の校舎が令和4年度中に建つのが、福間小学校区もあり、福間中学校も新しい校舎に建て替わりますので、そういう新しい学校に行けるんだと、行きたいというぴかぴかの福間小学校もそうになりましたが、そういう思いは子どもたちが楽しみなので、その思いは皆様と共有です。保護者のあなたとも同じですという中で、返答したんですけど、ちょっと紹介、それでも、保護者にとっても、やはりこの仲間と、この仲間づくりのためによりよい新設学校の配置というものをもう一度私の案も含めて皆様に考えていただきたいということで、あえて紹介させていただいた分でございます。

次に、学校建設は百年の計ということでございます。これはぜひとも、できれば教育委員の皆様とは共有させていただきたい価値観でございます。学校をつくるとは歴史をつくること、魂を吹き込むことと、これは書きましたけども、つまり、申し上げたいことはページをめくっていただきまして、この学校をつくるのは今本当に大変な作業。福津市になって初めての作業、新設学校は、旧福間町・津屋崎町の中でも、私が小学校5年生に上がる時に、福間南小学校ができて私は南小学校に移りました。これは、昭和56年のことですね。その一、二年前に神興小から分かれて、神興東小学校ができて、また二、三年前に福間中学校から分かれて福間東中学校が昭和50年代にできましたが、それ以降この旧福間町、津屋崎町、福津市、新設

学校はつくっておりません。当時の資料はいろいろ読み取れたり、当時書かれた方のお話も聞いたことは、ずっと聞いてきました。学校をつくるというのは本当に大変なんです。しかし、なくすのはもっと大変とされています。なくすことを、新設学校をつくるからには、今の新しい考えも確かにあるけれども、新しい学校をつくるということは、もうつくる当初よりです、まず。特に地元。校区再編等もあるから、十分な協議も必要でありましょう。学校新設ということは、大体校区再編ということがありますものですからね、基本として、しかし、地域の方に学校をつくるという当初より、そういう方針を市が決定するときより、大変この御理解をいただき、市民への思いが逆のベクトルで、本当にそこに悲しみや怒りが湧いてくる土地ではいけない。そして、またつくったからにはここも百年の計ということは、多くの市民の皆さんに愛されないも百年ももちませんが、やはり重要なのは児童数の推移であります。児童数がしっかりこの10年、15年、20年、少なくとも中期的に児童数が激減しない。これも皆様教育委員さん御承知ですけれども、今から24年前にできました、竹尾緑地から歩いて1キロも離れていないこの舞の里小学校が、今はもう空き教室がたくさんあって、古賀市の中では、廃校の一番の候補になっていますね、舞の里小学校。ここをいかに施設を転用させていくか、福祉施設というところを、また一方では学校を廃校しないでくれという声もあります。

学校をつくるということは大変な作業というのは建設もありますけれども、新しい校歌をつくり、その学校の目標とする理念をつくり、ここに学校をつくるからには、本当にしかも学校を継続していく中でどんどん卒業生も生まれ、愛校心、この日本の近來の教育制度の中で、本当に学校というものは、当初は大体村役場の隣に学校も配置され、ありました。戦前も合併がありました、昭和の大合併で多くの村役場は廃止され、ただ学校は残ったわけです。今やその学校が福津市でいえば勝浦小学校、上西郷小学校、神興小学校、福間小学校、小学校は中学校と違って長いところは145年近くの歴史を持った学校が福津市にも配置されています。学校というのは本当に地域の方の思いが込められ、そして、それ自体が歴史であります。学校を配置するからには、その過渡的な大変な作業も伴いますけれども、ここであれば多くの皆様に理解され、そして、多くの市民の皆様に愛され、いつまでも続くその場所、ここも学校を配置する場合のその場所として大変重要なところ、ここで竹尾緑地案、手光わかたけ案、ここも私の思いとして聞いていただければよいです。汎用性など考えるなど、そのまま打ちちゃったのでこういうふうになりました。手光わかたけ案は、汎用性など考える余地はないほど学校配置に適した場所と書きました。こ

こは児童数の推移のことをいっております。児童数が減ったので空き教室ができたので、今の考え方でコミュニティに開放するとか、もしくは別の用途に、この学校という公共施設を転用していくことも考えられますけども、なにより今からつくる新設学校でございます。今回私どものこの課題は、今からつくる学校を新設するに当たって、そういう先のことはほぼ心配は無用というか、そういうことを心配することが限りなく低い、つくったからには、もう児童数はいずれにせよ手光わかたけ案でも減っていくでしょう。それでも、そういう児童数の減る推移ができるだけ低く見積もられていて、しかもこの場所であれば、例えばまちの端っことか、まちの中心部もありますね、そういった中で本当にここに設置すれば、特に地元だけでなく、校区の方だけでなく、多くの市民の皆様にも愛される学校と、私の百年はそういうハード面児童数のこともあるけれども、つくる当初より皆さんに御理解いただいてつくれるそういう場所というのを適地として、適当な土地として考えていく必要があるという中で、この中央公民館わかたけ広場の場所というのは、そういう場所ではないかと思ったので、思いとしてこういうふうに書いてあります。市の中心部に手光わかたけがあるので、減るんですけども激減しないであろうと、周りに、この後校区のこと出てきますが、これから子どもがまた移り住んでくる可能性がある光陽台の4、5、6丁目、今どんどんまだ宅地化が進んでおります宮司の地、マンション群も多く抱え、この人の移動が、流動が一番激しい大和町のエリア、並びに南小校区にも配置されておりますけども、光陽台の1、2、3や、四角区や光陽台の南というのは、今光陽台4、5、6よりも先にきて児童数が増えてきております。このようにこの様々な地域的な特性や歴史をもった団地であったり、古いエリアがある中で、それぞれが絡み合っていて、児童数が1つの団地のど真ん中でできて、児童数が激減しているのは、これは舞の里小学校の現象でございますので、そうでない地というのは、この中央公民館ではないかということで、児童数のことではそのように考えております。

次に新小学校の校区編成は、であります。

これもめくっていただいて。

このように考えています。4月27日に教育部との協議の中でお配りした案は、日蔭野1区も入ってございましたし、宮司もまだ細かくは限定しておりませんでした。協議の中で、この宮司のエリアをこのようにさせていただき、しかもこれも案、しかもこの場所が決定ということではないので、この案も含めて教育委員の皆様にも今後教育委員会の中で考えていただきたい、最終的には校区というのは、校区の協議が必要になってまいります。こういうこの辺になってくるのではないかとこのこ

とで、校区再編成は、手光わかたけ広場の小学校を設置した場合はこういうふうになってくるのではないかとということでございます。

次に、同じ自治体の子どもたちが別々の小学校に、これも思いつきの中にも書いておりましたし、見解の中にも述べている。ここはやっぱり一つの現象、ファクトといってもよいけども、押さえておいていただきたいことです。教育委員の皆様、福津市内にお住まいでございますけれども、これ宮司のこと書いてます。宮司のこと、もちろん皆様教育行政に関わられているので、こういうことの情報が入っていると思うのですが、やはりこの、私が市長になりまして以降、特に毎年いろんな地域や、自治会に呼ばれて、自由な意見交換、協議を開かせていただいて、この宮司には宮司の郷づくりもありますし、それぞれ自治会もありますけれども、シニアクラブも子ども会もありますけれども、宮司の課題として必ず私が市長に当初就任したときより、最初は5月でしたけど、この問題が、市長はどう思っているということで、毎年言われるたびにこの問題出てきます。本市はコミュニティ・スクールを掲げております。本当に評価が高い。そのコミュニティというのは、郷づくりと置き換えることもできます。ただ、これは宮司郷づくりにつきましてだけは、宮司郷づくりで単独で小学校はもっておりません。並びに合併したのは平成17年で、宮司のエリアは本当に古いエリアで歴史ある由緒正しきエリアであります。新しい家もどんどん建っている、ある意味市街地に配置し、今は日蔭野もほぼ落ち着き、西福間5丁目もおよそ500戸ができ、この宮司の地区というのが今まだまさにコロナで大分落ち着いたんですけども、このエリアは幾らでも家が建つエリア、それで、既に合併当初よりここは決まったことなんだけれども、特にこの宮司2区や3区は旧来の津屋崎町のエリアであれば、津屋崎町であったころは津屋崎小学校に行っていたんですけども、やはり行政区が違いますからね、ただ合併して、もうこの特に宮司2区ですけども、福間小学校のほうが圧倒的に近い、1キロ内で行けるエリアもある、1キロちょっとの。津屋崎小学校まではおよそ3キロぐらいある、遠いところでは。なので、ここはその区域外でよいんですよ。津屋崎小学校に行くのが原則であるけれども、福間小学校にも行くことができるという、そういうエリアでございましょうか。現在もこの小学校入学の段階で、この宮司1区、2区、3区も、要は225名の方が津屋崎小学校に通われ、137名が福間小学校に通っておられると、今年。それで、この137名の子がおよそ中学校は福間中学校へ通うと、中学校の距離は津屋崎中学校のほうがかなり近いエリアの方が多いいんだけど、やはり小学校が福間小学校に入るので、福間中学校へ行くと。つまり、この過大規模校化が顕著な福間

小学校、そして、今後過大規模校化がすごく危ぶまれる、心配される福間中学校というのは、この宮司のこと抜きには考えられません。そして、私がこの提案している手光わかたけ案は、手光におよそこの宮司1区、2区、3区の子が同じ自治会の子どもたちが別々の小学校に通う弊害と、私の中では弊害でございます。コミュニティ・スクールは自治会とともにある学校ということにも置き換えることができるし、そもそもコミュニティ・スクールは地域とともにある学校でありますので、小学校の段階で完全に分裂したこの自治会があったといたしましたら、ここは子どもの親の世代は保護者であります20代、30代、40代の若い大人の世代が、およそまたその上の世代が主にこの自治会であったり、郷づくりの協議会の役員を務められております。この方たちは本当にこの若い大人の世代に、コミュニティ、自治会であり、郷づくりであり、シニアクラブ等入っていただく思いをもっている中で、このお子様の進学する小学校が分かれていることで、その若い大人の世代が、保護者の世代が、福間小に行かれる方が福間小のほうに入りますから、関係が強くなりますので、なかなかこの宮司については、自治会の経営や協議会、これはやはり学校を核とした地域とともにある学校、これがコミュニティ・スクール、それがこのやりづらいという、およそ郷づくりの方の役員さんや、自治会長の思いとしてずっと聞いてきたことでありまして、私の校区の再編案でも、宮司が校区で割れることになるんだけど、私がより重要と思うのは、郷づくりよりも少し小さい、郷づくりのまた基本でありますこの自治会の同じ自治会に住んでいる子どもたちが小学校に入る段階で分かれて、そして、中学校も分かれる。このやりにくさを、ここはしっかり教育委員会の皆様にも、教育委員の皆様にも、コミュニティ・スクールはしっかり推進していただき、それを全面的に市外に押し出していく、福津市の、ということはあるつつも、こういう現象が起こっているということはしっかり認識する必要があるし、これを解決する策としてちょうど今学校を建設しなければいけない段階にきているので、この中央公民館がある手光わかたけの地に小学校を配置すると、少なくとも同じ自治会の子どもは同じ小学校に通い、そして、その方が今では137名の宮司の子は福間小学校に行った子は福間中に、それが過大規模校なんですから、手光の小学校に行くと想定される宮司1、2、3区の子は、津屋崎中に行きますので、福間中学校の過大規模校化が緩和されるという案になっていきます。コミュニティ・スクールの機能再生というのも地域とともにある、小学校の子が大人に守られながら、本当に育つ、どんどん大きくなって今度中学校になったら大人たちに何か恩返しをしたい、並びにそういう帰属意識が育ち、そして、地元で恩返しができる、そういう効果がコミュ

ニティ・スクールの一つとなっておりますが、これがより行いやすくなる案が、手光わかたけ案ではないかと、私の中では思いがあります。

次に中学校の校区再編でございます。中学校の校区再編は、この地図のとおりです。私の案では、その46億円でできるという、その46億円でできる案は、わかたけ広場に小学校を設置する案でございますので、中学校は3つの中学校に進学して行くこととなります。福津市が今のところ人口推計で見えております中学生のマックスの生徒数は3,000人を越えないぐらいです。福間中学校が、1,800人になるんですけども、全市の中学校は約3,000人、これをふつうに頭だけの計算で割り振りますと、一つ一つの中学校が1,000人ずつということになります。しかも、その中学校は本市の都市計画マスタープランの中でもうたわれておりますけども、この福津市の3つの拠点、福間と、東福間と、津屋崎、ここに配置されております。この3中学校、私はまず喫緊なので小学校ということで、小学校をつくるのはここと、中学校についても可能性は残りますけども、この3中学校にできるだけ満遍なく、3,000人ですので、配置できることができれば、そこは校区再編にはまた様々な課題があるんですけども、手光わかたけ広場に小学校をつくるとして、その際、次に進学して行く中学校はこういうことになってくるのではないかと考えています。ここも眼目はやはり、福間中学校の生徒数の増加を緩和させることでございます。つまり、このページの中で書いている色は、これはみんな手光わかたけの地に小学校を配置した場合の想定される校区です。そこで、この子たちが今度は、大和1区、2区は、福間中学校へ。宮司1区、2区、3区出身の子は、みんな津屋崎中学校へ。そして、これは今でもでございますが、光陽台4、5、6と手光区の子は、従来通り東中学校ですけども、新たにこの手光の小学校に進学することが想定される光陽台1、2、3と、四角区、光陽台南は、福間中学校ではなく、距離的にもほぼ同距離、もしくは、光陽台南ぐらいなら東中学校のほうが近いんですけども、東中学校。この狙いも、増加、もう本当に過密化が心配される福間中学校の児童数を緩和するためということもあります。いずれにせよ、いずれかの中学校に通わなければいけません。その中でこの進学する3つの中学校が3つに分かれるということでも御懸念や御質問がこの後あるかと思いますが、先に立って私がこの小学校をここに配置することによって、逆にこの福津市の教育行政、教育施策の中で、こんなことが期待でき、これがまた未来につながる福津市の教育行政ではないかと、教育の専門家ではない中で、述べさせていただいているのが次のページでございます。

テーマ、体いっぱい遊べる学校。

小学校を配置を私は前提ですので、手光、特に小学生は遊びです。公共施設の活用・再生と書いています。そもそも、公共施設、ここは中央公民館わかたけ広場、キャンプ施設、ローラースケート場があったり、今アスレチック場はとりましたけども、飯ごう炊さん場もありまして、バンガローも5つ配置されております。それから、水場もあります。つまりもともと特に小学生、やっぱり小学生になってくる、小学生たちが伸び伸びとこの遊び、宿泊できる施設というのは、このわかたけ広場だったんですよね。つまりこの公共施設であるこのわかたけ広場は、もう竹尾緑地に学校を配置した場合でも財政計画上、とにかくスクラップすることで財源を捻出する場所になっています。中央公民館を含め。繰り返しになりますが、そもそも平成28年の9月に市が打ち出しました、行財政集中改革プランの中でも、わかたけ広場は廃止と、その方針がある中で、私が市長に就任しまして、もう少し残したほうがよいんじゃないか、まだまだ使えるということで、ただあまり全面的にこの施設をPRできていなかったし、ある意味アスレチック施設については老朽化が進んで撤去も完了させていただきました中で、それでもまだ自然がいっぱい残っています。虫や動物や植物ですね。キツネも、僕また最近も見ましたが、キツネやタヌキもイノシシも出ますね。スズメバチやマムシも出て危険とか書いてありますけど、とにかくここは森なんですよ。そこにキャンプ場がある。こういう既存の公共施設を有効に活用して、教育施設に活用できるんじゃないかと、もう一つの公共施設はこの3つめに書いておりますように、この児童センター「フクスタ」です。子どもの城、児童センター「フクスタ」、この福津市が合併いたしましたして、この合併特例債というか、まちづくり交付金かな、それで、約4億5,000万ぐらいかけてつくったこの子どもの城、児童センター「フクスタ」、ここには、学習室も配置されていておりますが、音楽の練習ができるスタジオであったり、小ホールであったり、あります。子どもが本当に、子どもがしたい、子どもが考え、ここに子どもが集い、何か交流し、親睦し、そして、何か新しい企てを行っていただけるような、そういうことを期待されてつくった、そして勉強もできるような、そういう環境がここにある。ただし、つくってはみたけれどもという言葉をあえて使わせていただきますが、なかなかここが、閑古鳥が鳴く状態まではいきませんが、夜9時まで開いておりますが、やっぱり静かな環境で勉強している方はいますが、ここで何か面白い企てが起ったり、やはり、稼働率ということでは、本当に子どもたちがいっぱい遊びに来ていろいろ交流する場になっていない中で、この「フクスタ」も十分手光の小学校から見れば、この場所も、ぜひ、ホールもありますし、スタジオもある、キッチンもある、学習

室もある、いろいろ使っていただきたいと思うけども、この中学校の再編の後に書かせていただいた効果は、卒業後新しい福津市の風になれと書いてます。この、手光の小学校で育った子どもたちが、遊びの中で培ったエネルギーを、3つの中学校に進学していきます。また、その新しい出会いもある、たくさんね。その友達も連れて、またその小学校のときに一緒に学んで、一生懸命遊んだその手光小学校の子たちが必ずこの中学校は3つに進学しますが、この「フクスタ」に集まってきて、友達も連れて、この何か面白い、まずは交流、遊んだりする、ここでその「フクスタ」に期待するのは、特にやっぱり小学生はいるけど、中学生や高校生が何かこう面白い企てを考えて市に提言するとか、そんなことで、そういうことで新しい青少年活躍推進係を教育委員会に設置してもらいまして、昨年度からスタートしておりますが、そういう行政側のサポートも必要だけど、子どもたちが主体に、もともと顔を見知った手光の小学校の子どもたちが、中学校になってまたここに友達を連れてくることによって、この福津にはたまたま本当に中学校が7つも8つもあるわけではなく、今のところ3つ、この3つの中学校の連携の取組はいろいろ開かれておりますが、この3つの中学生がより交流できる、そういう一つのこの手光小学校の子どもたちがインフルエンサーにと、影響を与えるものと、ちょっと言葉が一番何がふさわしいかなど、彼らがインフルエンサーになって、この3中学校の連携を切磋琢磨連携、面白い企て、そして、中学校になったんだから、この育った地元への帰属意識や感謝の気持ちも重要ですけども、津屋崎、勝浦小学校出身の子も友達も友達を通じて、上西郷の子と仲よくなったり、福岡の子が、津屋崎の子と仲よくなる。そのマックスでも3,000人いるこの3,000人の福津市の中学生たちが、よりこの混ぜ合わせて、そして、俺たち福津っ子であると、福津の中学生だというそういう意識を醸成させる、そういう効果がこの手光わかたけの小学校を配置すると考えられるのではないかということです。進学する中学校がそれぞれ分かれることによって、ここにはこの説明には、やはり情熱と並びに御理解が大変重要になってまいります。これが、その福津市が掲げるそのコミュニティ・スクールでもよい、SDGsのこの発展でもよい。自然を生かして、小学校であれば自然、山小屋、飯ごう炊さんもいつでもできる状態。目の前には、本当にこのまま放っておきますともう資材置き場や、何になるか分からないこの田んぼ、今はまだ田植えがしてありますけどね。田植え体験、稲刈り体験、野菜作り、こういうことを「フクスタ」を利用して、料理を作ったり、そして、本当に運動場は今もわかたけ広場だけでは狭いけれども、運動場にプラスアルファこの山もありますし、運動場の配置については今後もまた検討しなきゃ

いけませんけども、ここに配置することによって特にエレメンタリースクールですね、小学生が本当に目を輝かせて遊びを通じて成長していく、そういう学校がここでは可能だし、その後まだ民有地ではありますけども、協議が整えば、運動場を配置したり、駐車場を配置したり、ここは防災の拠点にもなると冒頭でも言いましたように、ほぼほぼもう進んでおりますが、この地に福津の消防署も来るわけです。法務局の裏に、ふくとびあの前に、もうここが本当に、行政、教育、福祉のゾーンとして、新しく展開し、いろんな市民の方が何かこうよいことを想像できる、そういうのにも資するということで、この小学校であれ中学校であれどこの位置に配置するか、建設するか、設置するかは重要な問題なので、そのことを、体いっぱい遊べる学校ができると、手光の小学校であれば、そういうことを思っ書いております。

次に学校運営に思うこと。

これも最後ですね。

今度またある保護者の方、これも決して私に対して批判でも反対でもない視点でございました。どちらの地域に住まわれている保護者の方か分からなかったけども、「子どもは柔軟なので、大人があれこれ考えていることは、子どもにとっては大した問題ではない気がします。」と、この方はどこか分からないけども、学校を建設しない方法も考えられるのではないですかと言ってこられた方です。スクールバスを出すことによって、やっぱり小規模化が進んでいる学校もある中で、そういうことも市長は検討されたんですか、検討もしてくださいと、要は先ほどの紹介した方とも似ているところもありますけども、「大人があれこれ考えていることは、子どもにとっては大して問題ではない気がしています。（中略）子どもたちが皆、のびのびした環境で学び育つことを切に願います。」ということです。その子どもたちの皆がのびのびした環境で学び育つことができる、一つの方向性として、国も進めていると聞いております、この小中一貫、そして、竹尾の地に中学校ということであれば、一小一中、福間小、福間中、南小、竹尾中、手光の地に小中一貫をつくった場合であれば、わかたけ小、わかたけ中でしょうか、9年間一貫して、きめ細やかに子どもたちの成長をきめ細やかに見る、また、それが中学校を卒業した後また大きく、高校生となり、社会に羽ばたいていく、それにいろんな子どもたちをこう見る。また、その中1ギャップという言葉もありますけども、中学校の先生と小学校の先生が連携する、もしくは体の成長も本当にあります。心の成長も専門的に分析されながら、5年生や6年生にクラス担任ではなく教科担任の先生が配置されて、英語教育なども教えていく、こういう小中一貫というものは重要だと思っています。一小一中はまた別問題。

その9年間、つまり教育カリキュラムとして、仮に5-4制であっても、6年生までの小学校と、中1から中3までの中学校がある中で、6年生には中学校の先生が教えに行つて英語を教えると、つまりその教育カリキュラムとして4-3-2制があり、5-4制があると私は捉えています。このハードの面ではなく。そういう教育カリキュラムは、全くこの困難を生じることであっても、手光の地に小学校をつくつても、考えていただきたいことは可能ではないかと、進学する中学校が分かれても、そもそもまずは重要なのは、どういう教育、そして、今日は私は懸念には思っております、竹尾緑地に6年生を行き、福間中学校に福間小の6年生を移動させる、このカリキュラム、小中一貫の一つでもあるんでしょうけども、完全に生活する場、勉強する場が分かれてしまう、この施設分離型の5-4制のことは、もう少し私も勉強する必要があると思ひますけども、その比較の中で、こちらの私の案と、そちらの6年生を中学校に通わせ、竹尾に中学校を配置する案を、しっかり教育委員の皆様と考えていただいて、どちらもあるんでしょうけども、一人一人の皆様でしっかり考え御協議いただいて、その教育委員会の中で御検討いただければと思ひます。

最後でございますけども、これは4月27日のペーパーの中でも読まれた方はあると思うように、この前段には大人が思うよりも私は書いているけども、本当に子どもたちというのは、もっとしなやかでたくましいということを書いています。学校の教育は、最後にですけども、子どもがいて、保護者がいて、学校の先生がいて、そして地域があるわけですよ、地域の方、保護者、そして、学校の先生、そして子どもたちが、本当にこの夢をもって、または希望を持ってやるのが教育制度であると思うんですけども、ですから、教育を施す先生にとっても教育しやすい環境、地域にとっても子どもを見守りやすい環境、保護者にとって本当に大規模校化ではなく、子どもにとって安心して子どもを預けられると思う環境が大変重要であります。その中で、それでも最終的なのは、やっぱり主役は子どもです。子どもにとって本当によい環境というのは、教育のしやすさとか、それもありますが、子どもがより成長するに当たつて、心の成長、体の発達、日々こうたくましく育つ、「志をもち、未来をたくましく切り拓く子ども」というのが、福津市が教育行政の中で掲げる最ものスローガンですよ。志をもち、未来をたくましく切り拓く子どもたちが成長する環境という面で、この手光に小学校を配置することは、どういうことになってくるのかということ、教育委員の皆様にも、私の提案する案として、今後御協議いただき、機会があれば、総合教育の会議の中でまた協議、意見交換をさせていただきたいと思ひます。このように、旧津屋崎町、福間町がこう合わさつた新しい

校区になります。この手光わかたけの小学校は、この新しい学校校区により、新しいコミュニティ・スクール、歴史づくりの段階に福津市はきていると私は思っております。過去もしっかりと重んじながら、今を生き、未来を展望する、そうした教育環境と、市の将来ビジョンは、新設学校を手光わかたけの地に小学校を持ってきてこそ一層輝くはずであると、輝くと思うということで示させていただきたいと思えます。

以上でございます。

それでは、今長くなりましたけども、なかなか総合教育会議もございませんので、大体お話をさせていただきました。

これにつきまして、今日は質疑応答といえますか、意見交換の時間を取らせていただきたいと思います。どの委員さんからもよろしいので、今私が説明した中でこの辺がよく分からない、もしくはこの辺のことはどうなるんですかということ、御感想も含めてでよいので、御一人ずつ述べていただければと思います。

半澤委員：ではまず、市長が学校建設問題について心を砕いてくださっていること、福津の子どもたちのためにどうするのがよいかということに取り組んでくださっていることに、まずお礼を申し上げます。

市長もおっしゃったように、教育委員会から、まず竹尾案を提案させていただいた後、市長のほうから、その代替案として、中央公民館での小中一貫校という案を経て、今の手光に小学校を建設という案を提案させていただきました。そこで改めて竹尾案と手光わかたけ案を、ゼロの状態から再検討をして、両者のメリット、デメリットについて論議を重ねてまいりました。それを踏まえまして、ここで私は次の2点に絞ってお話をさせていただきますと思っています。

まずは、福間中校区にもう1つ中学校が今必要だということ、次に、福津市がこれまで全国に先駆けて取り組んできたコミュニティ・スクールを、このままの形態で存続させてほしいということです。

では、1つめの福間中学校区に新中学校がなぜ必要かということですが、竹尾案と手光案を比較いたしますと、ピーク時の生徒数が、竹尾案では、福間小が令和10年度に1,500人程度、手光案では、福間中で令和13年度に1,600人程度というのが最多であるとなっております。仮に1,500人規模の小学校と1,500人規模の中学校を比較した場合、小学生は6学年ですので、1学年は250人ずつですね。しかし、中学生は3学年で1,500人ですから、1学年あたりの数は500人にもなります。これは、2019年度の福間東中の全校生徒が487人なので、単純に福間東中学校3つ分の規模だと考えられると思います。学級数にして1学年15クラスにも

なります。

大人と体格も変わらない中学生が、この人数で体育祭、文化祭、修学旅行などのイベントの収集がつくでしょうか、入学式や卒業式、我が子の晴れ姿を見たい親御さんも含めるとさらに人数が増えます。

思春期の難しい時期でもあります。

先生たちも何かあるたび、対応に追われています。

三者面談や家庭訪問、不登校問題、ときには警察に呼ばれることもあるかもしれません。その全ての責任を持つひとりの校長先生の重責はいかばかりでしょうか。

そして、3年生は高校受験という大事な戦いも控えています。プレハブ校舎で不便を強いられ、建て増し、建て増しで、どんどん狭くなる運動場で部活動もままならない、そのような状況が刻一刻と迫ってきているんです。

福津市に今すぐ必要なのは、小学校ではなく中学校なんです。しかし、もちろん福間小、南小も過大規模校であるということは事実です。本当は小学校2校、中学校1校を建てないと、根本的な解決にはならないんです。

でも、今財政的にそれは不可能であるという状況があります。だからこそ5-4制を導入し、6年生を中学校で学ばせれば、1つの学校しか新設せずに3つの過大規模を緩和、解消することができる、一石三鳥な案だと思います。

5-4制については、賛否両論あるかと思いますが、5-4制ならではのメリットもたくさんありますので、この状況を踏まえて、福間中校区には、そうするのが最適なのではないかと考えます。6-3制や5-4制ということにこだわらず、小中の9年間で子どもをよりよい方法で育てることが大事だからです。

次に2つ目の、コミュニティ・スクール、CSについて申し上げます。平成29年度より全国的に広まりつつあるCSですが、福津市ではこれに先駆けて、平成18年度より部分的に導入、平成23年度より福津市内全小中学校で取り組んできました。私はその平成23年度より、福間東中でPTAや母親代表を務めさせていただき、そのとき娘が中学生、息子が小学生でしたので、今からほぼ10年前のCS導入期からともに歩んできたように思います。そのころ福間東中では、CS活動の一環として、ボランティア活動が始まったばかりでした。子どもをどうやって地域郷づくりの方々と関わらせるか、ボランティアの項目は多岐にわたりました。お祭りの手伝い、地域の掃除、小学生に勉強を教えに行ったり、小学生との星座観測会なんていうのもあったと思います。子どもたちは自分から行きたいボランティアを選び、手を挙げて行くのです。その結果、当時、ほかの市町村の平均値よりはるかに下回っていた自尊感情が、

今では向上したと聞きます。小さなありがたいの積み重ねが、子どもが自分を価値ある存在として認める助けになったのでしょう。

子どもが育った後、教育委員として再び福津市の教育に向き合ったとき、あのころのボランティア活動が今では東中のCSの特色として根づいてくれていることを知り、うれしくなりました。福間中校区ではトークフォークダンスや回し読み新聞、未来会議など。津屋崎中校区では、津屋崎山笠や人形浄瑠璃、獅子楽などの伝統行事。そして、地域とともに行う防災活動など、福津市のCS活動は今発展期を迎え、それぞれの校区で、それぞれの形で、実を結んできつつあります。これらは、学校と郷づくりの共働によって、そして、関わってきたたくさんの方の努力によって長い時間をかけて受け継がれ、改良され、定着してきたものであり、ほかの市町村に先駆けて、福津市が取り組んできた一つのモデルケースのデータであり、福津市が誇るものだと思います。

それぞれの地域の学校運営協議会にも、郷づくりの方々が委員として多数ご参加いただいております。郷づくりとCSの連携ということを見ると、一小一中の形態が最もその効果を発揮できると思います。子どもたちは小中9年間を通して、一貫した地域の特色を学び、顔見知りの大人に見守られながら、ふるさと福津への愛情を深めていけるからです。郷づくりの方々にしても、関わった子どもの成長をずっと追うことができ、また、何かの行事の際には、その子に合うのを楽しみにくださったりしています。このような活動が円滑に受け継がれるように守っていくことも大切なことだと思います。

一方、校区再編は、子どもたちや保護者だけでなく、子どもたちを長く見守ってくださる郷づくりの方々にも混乱を強いるものです。再び今のような円滑な活動ができるまで、一からまたつくり上げる労力と時間を考えると、避けられるものなら何とか避けるべきなのではないでしょうか。

最後に、市長に質問させていただきたいのですが、市長の表明された、新設学校建設に寄せてという文章の中で、校区再編をした際に、神興小と神興東小を1つに統合すると書かれていますが、その統合の時期や、具体的内容についてどのようにお考えなのか、聞かせていただければと思います。

お答えは、ほかの方々の発言の後、最後にまとめていただければと思います。

以上です。

今村委員：よろしいですか。

私は中学校に33年間現場で勤めていました。それで、大規模校も経験しましたし、仮設校舎の学校も経験しました。そういう自分の経験に基づいてお話ししたいと思います。

今、竹尾緑地か、手光周辺かということで、場所が問題になっていますけども、実は、箱物づくりじゃないから、中身が非常に大事だと思います。今、半澤委員さんが言われたこともあるんですが、それと関係するんですが、私は中身の問題をちょっとお話ししたいと思います。

一つは、小中一貫のことですね、もう一つは、大規模校をどう考えるかということですね、この2点から述べたいと思います。

まず、小中一貫の教育課程ですね、5-4制とか、4-3-2制とかありますけど、6-3制でも小中一貫はあるわけですよ。市長さんも言われたように、一貫性を支持されていますけども、それで、小中一貫の理由を考えますと、例えば、英語が5年生からもう教科として入ってきました。それから、美術とか音楽とか、そういう専門教科ですね、技能教科といいますかね、こういうのは、小学校の先生は、非常に大変というよりも、もっと専門的な知識、技能を身につけさせるためには、中学の先生が小学校に行って、そして教えるということがこれから求められていますし、文科省のほうもそれを推進しています。そして、児童生徒を取り巻く状況が非常に変わってきて、いろんな教育をしなければいけなくなってきました。スマホとかパソコンの利用方法とかですね、そんなのありますので、そういう意味からも小中一貫というのは非常に求められていると思います。不登校の問題もありますし、小学校や中学校に入るギャップで不登校になる児童生徒もいます。そういうようなことから、専門性が高い技能教科は、もう教科担任制にしていこうという考えがあると思います。それで、そういう意味から小中一貫の必要性があると。では、なぜ5-4制なのかと、福津市は5-4制にしたほうがよいというのは、一つは、小学校6年生は小学校の最上級生として、リーダーとして育てられます。ところが、中学校に入ると、一番下の下級生ですよ、そしてまた一から、上級生から見たら下級生ということで扱われてくると、これは教科の面でもそうですし、国語科の先生のお話を聞くと、せっかく6年生で国語の読解力を教えても、また中1で同じようなことをする。これは、幼稚園の場合ですが、幼稚園で非常に運動技能とか育てても、小学校に入ると、幼稚園生が入ってきたということで見られるということで、そういうことで6年生を、もう1年後には中学に入るわけですから、今度中学校の新築ということで、それを一つの機会のよいチャンスだと捉えて、6年生をもう中学生と一緒に勉強される、もちろん勉強の中身は違うわけですが、それで、中学校の先生が小学校に来て教えると、それで、校舎はもう隣同士とかになるとと思います。そうすると、6年生が中学に入ったときに、ああ、あの先生に習ったということで、ギャップが非常に

なくなるわけですね、小中のギャップが。それで、中学生も隣の教室に小学生がいますから、中学生が小学生にいろいろなプレゼンとか説明をしたりとか、自分が体験したことを教える、また、反対に、中学生の子が小学生から学ぶということもできると思います。それで、非常に違った学年間の交流、コミュニケーション能力の活発化に、アップにつながると思うんですよ。特に英語なんかは、小学校の先生非常に苦手な先生もいらっしゃるんで、英語、音楽、図工、体育、そういうようなものを、専門性を生かし、質の高い授業ができるということで、5-4制ですね、そして、学力向上が期待できる。ただ、エリート養成ではありませんので、そこはちょっと勘違いしないようにしていただきたいと思います。

それから、行事の観点から見ても、中学校の行事の一部に小学校が参加するということが、次の中学1年生のリーダーが育つということもあります。それで、ちょっと言いましたが、小中のギャップを緩和し、不登校防止にもなるということです。

そういう意味で、5-4制というのは、非常にこれから求められている。小学校は6年で終わり、中学校は3年じゃなくて、連続性を考えた場合に4-3-2制か、5-4制があると思うんですが、今度の中学ができる福津の場合は、5-4制がふさわしいかなというふうに思っています。

それから、次に福間中の過大規模化ですが、これを見ましたら、市長からいただいた資料を見ましても、令和13年度には竹尾緑地案では1,295人、手光わかたけ案では1,632人なんですよ、1,632人といったら42クラスぐらいです。それで、各学年のクラスでいったら、13、14ぐらいなんです。これをプレハブで解消しようというのは非常に、私もプレハブ校舎を経験しましたが、まず生徒に落ち着きがなくなります。それから、トイレは、生徒の数が増えても、原則として一つのワンフロアに2つなんですよね。そうするとトイレが混みます。

ちょっと戻りますけど、そういうようなこともあるんですが、まず過大規模校になると、学校行事などで役割分担の少ない子が出てくるんですよ。例えば体育祭をするというときに、役員は決まっていますよね、数は、そうすると、十何クラスあると、もう役員にならない子が出てくると、いろんな学校は行事が多いので、体育祭、文化祭、修学旅行、もういろんな行事があつてそれぞれのその委員会を立ち上げるわけですが、生徒の数が多過ぎると、結局役をしない子が出てきます。そうすると、社会性や自律性、責任感が育たなくなってきます。それから、ちょっと細かいですが、掃除も全員でやりますので、掃除区域は変わらないわけですよ、そうしたら、1,800人もいると、絶対掃除をしないでよい子が出てきます。それは、もち

ろん半分に分けてすれば、半分に分けて今日はA、次の日はBと分ければよい、それは、いろいろやり方はあると思うんですが、生徒があまり多いといろんな係活動ができなくなります。それから、同学年でも、お互いの名前、顔を知らない、ということは生徒同士のトラブルにつながる可能性があります。それから、教師も大体5クラスぐらいしか教えませんので、事務仕事になると3人でもつようになります。そうすると生徒の顔も知らない。そうすると、何かトラブルがあったときに生徒の名前も顔も分からないので、寄り添った指導ができなくなります。だから、プレハブがある、ないの関係じゃないです。それから、学校は非常に行事が多いので、2年は職場体験、修学旅行、卒業式、入学式、いろんな行事があります。そのときに体育館とか運動場に移動して、集合して、解散するのに2倍の時間がかかります。福間中は今、800人なので、マックスになると1,600人ぐらいになりますよね、そうすると2倍の人数です。ということは、時間が例えば体育館に移動するのに2倍かかるんですよ。そうしたら、集合して、整列させて、解散するだけで1時間かかります。そうするとその分は、授業がどうなるかということですね。大体50分単位ですので。それと、校外学習のときですよ、施設によっては人数が多過ぎると断られる場合があるんですよ。大体13、4クラスだったら、一遍に入るような施設ないと思います。そうしたら、また校外学習にも支障が出ます。それから、災害のときに避難してくださいと言ったときに、大人数の子が避難するというのは非常に大変です。火事とか地震とか、万が一の場合ですね。それから、休み時間のトイレが不足する。それから、少人数学習ができないんですよ。神興小へ私行きますけど、神興小は非常に児童が少ないですが、教室がかなりあります。2つに分けて授業ができるんですよ。放課後、宿題が家でできない子を集めて指導したりしています。神興小とかは。だから、児童生徒数が少ない学校というのは、ある意味、教室が余っているから、子どもたちを分けていろんな活動ができるということで、単に統廃合すればよい、少なくすればよいという問題ではないと思います。それから、児童生徒一人当たりの運動場スペースが少なくなります。もう本当に。それから、教師集団から見ても、教師の立場から見ても、もうこれ明らかに児童生徒一人一人の個性とか行動を把握して、きめ細やかな指導をすることが非常に困難になります。対応が遅れると、場合によっては、子どもの数が命に関わります。

私、福間中の竹原校長にお聞きしてきたんですが、まず、今の福間中は、今800人ぐらい生徒がいるんですが、まず、身体的に留意すべき子どもが100名以上います。それから、食物アレルギーで配慮が必要な子どもが30名ぐらいです。それ

から、生徒支援委員会といって、毎週1、2回不登校や、問題行動や、家庭問題のことについて教師が集まって話し合うんですが、大体各学年に10名以上います。そしたら、1時間かかるんですよこれ。ところがこれ2倍になると、単純に2時間かかるということです。ただ、教師は授業がありますよね、そうしたら時間割を組むのが非常に難しいですよ。みんなの空き時間をそろえなきゃいけないから、だから、クラス数が多くなるというのは、プレハブを建てて生徒を入れればよいという問題じゃなくて、生徒の活動にも非常に差し障る、先生の活動にも差し障る。それから、朝、生徒が登校してきます、そうすると、出席の確認をしなければいけません。来ていない生徒は家庭に電話連絡をします。そうしたら、十数クラスあったら、電話十何台もないですよ。そうしたら、自分の携帯で電話したり、そして、来ていない子には、まだ来ていませんけどと電話して、家は出たんですけどと保護者の方が言ったときに、じゃあ保護者の方お願いしますといったときに、いや今職場にいるんですよといわれたときはこちらが探しに行かなきゃいけないんですよ。まあそれは、クラスが多ければ先生の数の多いのは多いんですけど、そこで、朝ばたばたすると。それと、子どもたちの学力にも差があって、その指導というのもあります。そうすると、それも2倍になりますよね、この子たちも。だから、そういう学力補償の問題もある。それと、先生の多忙化ですね。もうまず先生の健康というか、心身に不調を来す先生が出てきます。当然これは生徒指導にも影響があります。それと、校長先生の立場からしても、学校運営が非常にやりにくいんですよ。もう教師の数だけで、例えば、15クラスとしますね、そうすると担任が15人です。副担任が5、6人です。合わせて20名です。それが3学年だから、60名になります。60名の教師を、一人の校長先生が束ねる。マネジメントすると。当然副校長とか、教頭先生がつくと思いますが、校長先生はあくまで一人ですので、そういう点で、学校運営にあたって、非常にマネジメントに支障を来すと。それから、ちょっと考えてみてください。体育館、プールは1つなんです。夏になると水泳の授業が始まります。45クラスあれば、プールは1つしかないのです。もうプールの授業できなくなります。体育館もそうです。だから、2倍あればよい、プールは2つ、体育館は2つあればよいんですが、そういうことはないですよ。以上のことから、やっぱり中学校を先に、過大規模を解消するというのが一番です。さっき、半澤委員も言われていたけど、身内の立場に立って、中学校になったら教科担任制なので、定期試験とか点数つけとかは、またがってクラスをやるんですよ。そうすると、小学校は自分のクラスだけですけど、またがってやると、それから、進路指導とか、進路相談、三者面談、願書の配

付、大体私立と公立2つ受けますので、2倍になります。願書点検、入試指導あります。それから、部活動は体育館、運動場を使います。そうすると、それらができなくなります。もう本当に。だから、まずつくる必要があるのは中学校。本当は中学校と小学校の両方が必要なんです。それができるのだったら、手光でもありかなという気もしますが、そうすると、手光の田畑をまた買収とかいう時間の問題も出てくると思います。そういうようなことから、これを聞いてくださっている市民の皆さんとか、市長にも子どもさんがいらっしやると思うんですが、自分の子どもが、こういう人数の多い学校に行くとなると、やはりちょっとどうかなというふうに、私だったら考えます。ですから、まず中学校の建設をお願いしたいです。

ちょっと長くなりましたけれども、すみません、以上です。

藤井委員：半澤委員と今村委員と重複する話もあると思いますが、私の意見を述べさせていただきます。

福間中学校区の過大規模校の解消、緩和には、私も中学校を新設するしかないと考えております。

現在の生徒数、全国一の中学校が神奈川県にあります。西中原中学校というところですが、生徒数が約1,300人です。全国一で1,300という規模です。福間中学校の今後の生徒数増加を見てみると、もし何もしなければ、このまま何もしなければ、1,300を超えて、ピーク時には1,800人を超えるということになります。このような超過大規模校で、学校としての機能が果たせるでしょうか。保護者として一番心配なのは、学校生活における安全面です。災害のときなど、避難時に人が多過ぎて移動も簡単ではありません。そういった中で、速やかに避難できるのか、安全確認が困難となります。登下校時もそうです。一斉下校となれば通学路もごった返す。やむを得ず、車で送迎する保護者もいることでしょう。そうなれば学校周辺の交通量はいかばかりかと考えます。また、今回の新型コロナウイルスもそうですが、感染症についても過大規模校では集団感染のリスクも高まります。屋外での活動や体育の授業、水泳、先ほど今村委員も言われましたが、果たして一人一人に目が行き届くのか、教師の負担も大きいです。中学校の部活動、現在多数の部員がいます。多過ぎるとやはりけがや内部のもめごとなどを引き起こしかねないという不安もあります。福間中学校の今の女子テニス部の人数を聞くと50人を超えて、陸上部、卓球部はさらにそれを超えているのではないかと聞きました。このような多人数の中で活躍できる選手の人数は限られています。やる気が出るのか、目標をもってできるのか。子どものやる気をそぐことになるのではないかと、このあたりも心配になります。生徒一人一人が目標をもって輝ける場面をつくってあげることで、自己肯定感も高まり、自己の能力も

上がっていくように思います。生徒数増加により、こういった問題が解決できるよう、早急に対応が必要だと思えます。何よりも一番に考えるべきは、子どもたちのことです。子どもたちが安心、安全に学校生活を送れるよう心から願っております。仮に竹尾緑地に中学校をつくると考えたとき、竹尾緑地の全体の3分の1を学校にするわけですから、子どもたちは大人と一緒に環境保全活動を共同して進めていくことができます。もちろん今のビオトープなどはそのまま、福津市ならではの環境教育ができると考えられます。現在福津市のほかの学校においても、環境教育が行われています。一つ例に挙げると、福間南小学校の「大好き！上西郷川」プロジェクトです。私は子どもが3人いますが、五、六年前に、福間南小学校、そして、福間中学校へと通い、子どもたちは常に環境についての学習をしてきました。福間南小学校では、上西郷川について学び、川には様々な生き物がいることを知り、上西郷川に出向いてごみを取ったりと、住んでいる生き物が住みやすくなるようにと、地域の環境を大切にしようとする心が育ってきました。そして、川が再生し、魚も人も戻ってきたという報告もあります。このような、小中つながる環境教育が可能になるのではないのでしょうか。

手光わかたけ案でも、もちろん市長がおっしゃったように裏山に自然があり、子どもたちが伸び伸びと遊ぶことはできると思えます。ここでも、このような学習は可能ではあります。ただ、手光の場合は、このままでは、小学校にしても、小中一貫校にしても、グラウンドの確保が十分ではないように思えます。市街化調整区域でもあり、この用地を取得することも困難に思われます。

前回の会議で、市長が、竹尾緑地だとグラウンドが狭い、狭いと、この件で、何度も何度もおっしゃっていたのがすごく心に残っております。しかし、今回のこの案では、竹尾緑地の案よりももっと狭くなっております。

市長：小学校と中学校は、運動場の広さが基本違うので、中学校は野球部、サッカー部。

藤井委員：ただ、狭いからそこがだめだとおっしゃっていたのに、また、わかたけ案でさらに狭くなって、分かりやすくいうと、現在の小規模校の上西郷小学校や勝浦小学校と同等の規模のグラウンドになっています。それで、ここに結局のところ、小学校と中学校では違うかもしれませんが、どちらにしても1,000人規模の生徒が思い切り走れるグラウンドが本当にできるのか、そこをちょっと疑問に思います。

市長：お答えしますよ。

藤井委員：はい。あとでお願いします。

それで、先ほどのそれと校区編成を聞いておりますと、そこ

もちょっとかなり無理があるように感じます。

教室に生徒が入ればよいというわけではありません。

私たちは、学ぶ環境を整えてほしいということを願っております。それには、学校、地域、家庭の連携が必要です。冒頭に、中学生マックス3,000人だから、中学校3校へという話がありましたけど、そういうことは、ちょっとおかしいのではないかと思います。

適正の生徒数、クラスで学ぶことが学力向上につながりますし、先生方の負担も減ります。過大規模校の問題が一日も早く解消、緩和できるように、私たちも早急に対応すべきと思っております。

以上です。

青木委員：すみません、冒頭1時間半ということでしたけども、もう20分過ぎておりますが、大丈夫でしょうか。

榊参事：はい。できれば、12時半ぐらいまでには終わりたいと思っております。

青木委員：私も1時間ぐらい時間いただきたいんですけども、端折ってお話させていただきたいと思っております。

市長：私はよいです。

青木委員：まず今回のこの建設の問題というのは、やはり市の対応ということで、時期が遅れているということが一番最初のスタートでそれがやっぱり保護者や関係者の不安というのをつくっているんじゃないかなというふうに思います。

私自身も個人の意見というのはありました。

しかし、教育委員会や教育委員、あるいは、大学の先生などのお話を聞いていく中で、少しずつ、考え方も変化するところもあり、やっぱり個人個人の意見というのは市民の数だけあるんじゃないかなと思いますけれども、市として、教育委員会として、この問題をどう解決していくのかというのを、本当に早く、先ほども言われていましたけれども、本当に早く解決していくということが、市民の不安を取り除くということになるんじゃないかなと思います。

いろいろ市長からも御説明ありましたし、教育委員の皆様方からのお話があったんですが、費用の面とか、安全性とか、いろいろ問題が山積しているわけですが、「子どもたちの教育効果がどちらのほう上がるのか」というところが一番大切な問題じゃないかなと思います。

その教育効果ということを考えたときに、時間をかけて、私たちもずっと話し合いを繰り返してきましたけれども、やっぱり中学校というものが必要なんじゃないかなという考え方にまとまりました。

それで、手光という場所に、小学校中学校両方一緒につくるということなら、また話は変わってくるんですけども、いろ

いろな問題の中で、中学校をつくるか、小学校をつくるかという問題になって、場所の問題ではなく、教育効果を考えたときに、やっぱり中学校が必要なんじゃないかなというふうに考えます。

それで、将来の長い目を見たビジョンとして、手光案と言われておりますけれども、現在の手光地区というのは、まだ開発もなされていないですし、人口も少ないです。それで、将来にじゃあ確実に、手光というところに総合的な施設が全部集まって、住宅地が建って、福津市の中心地になるのかということ、はまだ不確定な状態だろうと思います。

それで、現在確定していることは、やっぱり、福間中学校、福間小、福間南小の過大規模ということ、これが確定している現状なので、今の子どもたちのこと、先ほどからも子どもたちがやっぱり大事なんだということと言われておりますけれども、やっぱり今困っている子どもたちのことを、あるいは、保護者をどう救っていくのかということ考えた場合、やっぱり中学校になるんじゃないかなろうかと思えます。

市長の立場というところからも、大変な立場とは思いますがけれども、新しいことを始めるときには、やっぱり3割の方は賛成、3割の方は反対、そして真ん中のどちらか分からないところが4割おられると思います。その方々にやっぱり丁寧に御説明をしていく中で、新しいことを始めるということは、決めていかなければ、100%賛成ということでは、話は絶対に全てのことは進まないと思えます。

先ほどから、細かい説明がありました、一つ一つに私もちょっと意見はあるんですけども、時間がないのでこの辺で割愛させて、終了させていただきますが、私たちは副市長さんと一度も交流というか、お話しする機会がなかったので、あとで構いませんけれども、副市長のお考えというの、少しの時間がかまいませんけれどもお聞かせいただければと思います。

まとまらずにすみませんが、失礼いたします。

副市長：まず、教育委員の皆様方本当に熱心な御協議ありがとうございます。それから、本日傍聴にお越しの皆様も、学校建設について、多大な関心をお寄せいただきましてありがとうございます。

先ほど皆様がお話されたコミュニティ・スクールのことは、私も中学生や高校生や大学生、社会人の若い方々と会うたびに、皆さん、目をきらきらさせて、「私たちコミュニティ・スクールで育ったんですよ。だから、この地域のことに関わりたいです」と言ってくださっているのは本当に実感しています。その今までの積み重ねに、さらにグローバルな視点とか、環境保全の視点を充実させて、さらなる発展をしていく、そのためにも教育環境の整備というのが非常に重要な課題であると

いうふうに認識しています。

私の立場で申し上げるとしたら、一つ。福津市はSDGsの未来都市です。そのことについて、持続可能なまちづくりを担う子どもたちのことを考えてみますと、社会と環境と経済のバランスの取れた発展が必要であるということを再度確認したいと思っています。

この社会と環境と経済の3つを、対立する項目にしないで、いかに相互に関係しあっているかということを理解して、共生していく道筋をつけること、それこそが今度つくる学校の大事なミッションになるんじゃないかなというふうに思います。

それにあたりまして、実は今回の学校建設の候補地になっています、竹尾緑地とか、わかたけ広場のエリアの環境保全に、これまで関わってくださった皆様方への感謝の気持ちであったり、配慮が不足していたことは本当に心からおわびを申し上げたいと思います。竹尾緑地は特にこの10年間、里山みまもり隊の皆様方が環境保全に取り組んでくださっていますし、実はその前の、さかのぼりますと200年前から、農家の方々が木々を植え、伐採して炭を作り、そして暮らしの中で里山を守ってこられています。それが近代になって、人が入らなくなって荒れている里山も全国たくさんありますが、改めて今これを機に、長期的な視点で、里山保全をしっかりと考えて、次世代の担い手である子どもたちも一緒に活動していける、そういう活動に取り組む必要があると再認識しております。

今回のような難しい問題であればあるほど、先ほど青木委員もおっしゃっているように、意見も分かれるし、全員が納得できる解決策を見つけるのは、難しいことではあると思いますけれども、やはり皆さんが今日言っていただいたように、子どもたちの未来をつくるために、今、冷静に根拠に基づいた情報を踏まえて解決策を見出していく、そのためには教育委員の皆様、それから、市の職員、そして、支えてくださっている市民の皆様の方を一つにしていくのが、市長と私の大事な役割だと思っておりますので、どうぞ御協力のほどよろしく願いいたします。

ありがとうございました。

榊参事：御時間がかかなり超過しておりますが、委員さんからの御質問等もありましたので、それをお答えする形でそろそろまとめをお願いいたします。

市長：次回、総合教育会議とは、ふつうにやるときはいつあるんですかね。

そこは最後にしまししょうか。

今日一応12時半までですけど、私の話が長かったこともありまして、それから、御質問された、ふつうなら一問一答に近い、何度かやり取りもあります。

私が今から答えることについて、また、反論というか、そういうこともありますので、ちょっとここでは、私が議長なので、委員さんの了解を得れば1時ぐらいまではよいんじゃないかなと思っていますけどね。

その後ございますかね。

やはり、しっかりとした意見交換が行われたいといけません。今から話す前にそういうことを言ってますけども、その私と教育委員さんが、しっかりこの協議できる場というのは、本当にこの総合教育会議しかない、総合教育会議しかないというか、内部の協議が仮にあったとしても、この総合教育会議のその位置づけ、教育委員さんの皆様があって、教育行政が市長部局と独立しているんですからね。ですので、申出もあって、一見対立抗争に見えますけど、この総合教育会議が位置づけられて、この意味合いというのがすごく重要で、それぞれ御質問されたいものを事前に、もう用意されていたと思います、私の説明も大体想定される中、その中でも、私も今御質問を受けて、その点についてはこう思っています。この点についてはこう思っています。この点についてはこう思っていますということ。これを今から述べるんだけど、それについては、いかがなものでしょうかという再質問はやっぱりあるわけですから、ここは本当に、これは議会にはそぐわない案件なんです。議会、教育委員会、市長部局というのがあって、市民の皆様から見たら、市長部局と教育委員会は一緒に見えますけれども、議会は最終的に、議案が挙がってきた案件を、予算が伴い議決するところです。そして、議会のほうも、今、早く教育委員会と市長が話の折り合いをつけて、議会に提案していただきたいというふうになってはいますが、今も現実こういう問題は全国でも今までは本当に起こっていたけれども、裁判になったような問題もあり、逆に教育委員会がここに持ってきたところを、市長の権力でもって、こっちに持ってきたと言ってる市長が訴えられたこともある。そこは、それで、そういう案件があるということで、様々この3月、4月ですね、私はこういう協議はすごく大切と思って、1月はそれでも様々な縛りもあって、本音のところと言えなかったけど、その後何人かの教育委員さんと話す中で、そういうことだったら市長の本音を聞きたかったと言われたこともあって、今後もっともっとこういう総合教育会議は、月に1回教育委員会が開かれているんだから、教育委員会の後に総合教育会議というのを招集させていただきたいぐらいの思いがあります。

こういう時間の制約があっても、本当に私は教育委員の皆様と話したい。本当に。

そして今から、なので、私が今からお答えいたしますけども、再質問はぜひお受けしたいと思います。

それから、質問されなかったことは、私のせいで省かれているなら、やっぱりここはどうしても聞いておきたかったという問題は御質問いただきたい。

まず、一番やはり特に今村委員さんが思い、これをいろんなケースが考えられるということで述べられた、この中学校ですね、私もここが一番正直頭を悩ませます。

まず今、これを事前に申し上げます。

1, 600人も、1, 500人も、1, 400人も、要は過大規模校化というのは変わらないけども、この人口基準を見ているのは、市長直轄のまちづくり推進室なんですよ。そして、コロナがありまして、本当に3月、4月、5月と、人口の流入が激減しました。これが議会でも述べたように。児童数の推移をしっかりと見ていかなきゃならない。これを見ていくのは、教育部というよりも、まちづくり推進室の、市長部局の仕事でございます。

つまり言いたいことは、それはつまり一応今村委員も各委員さんも、手光に中学校をもってきた場合であっても1, 600人を超えると、そもそも1, 600人というのは、もうあり得ないと、そもそも全国の中で神奈川県が中学校に関しては1, 400人を超える学校がないわけですよ。

これがその高校と中学は違いますけども、もちろんこれは御存じのように、高校はあります。じゃあ何であるのか、全然また高校生と中学生は違うんだけれども、義務教育でもございませぬ。そもそも校舎も大きいし、運動場は、県立高校、うちにあります、この県立光陵高等学校の運動場を見てもらっても分かるように、本当に広い、中学生よりも高校生のほうが、どちらが育てにくいかわかるか育てやすいかある中でね。

そして、その私は現行中学校が、福間中学校が、今のまま手光に学校をつくって1, 600人になったら、とても耐えられないと思っています。敷地の面でです。運動場は狭い。その部活動が、例えばバスケットボール部のレギュラーメンバーは入れかわりますけど5人とか、本当にこの部活動も、そういう細かなこといろいろおっしゃられたのが今村委員なので、書きとってはいますけども、1, 600人になった場合、プレハブ校舎のことも言われたけれども、現在の運動場では足りないと思っています。運動場ばかり言うんではないんです。でも、1月の運動場のことを言っていたのは、教育委員会もいろいろ竹尾案の中でおっしゃられる中で、その今200メートルのトラックが竹尾緑地確保されているんですかね、私は本当に中学校が野球部、サッカー部、ソフトボール部、テニス部、陸上部等が本当に活動できるようなものが、活動できる課外活動が、そういう運動場が配置される環境を整えないと中学校はだめだと思っている。これから未来志向では、運動場の広さだけでは

ないけれども、そして、そういうものが確保される案というものを、具体的には見ていないんですよ。1月のを思い出していただくように、私がオーダーした資料は、3中学校の空撮図、これだけを配ってと言ったんですよ、あのときは。福間中学校と、津屋崎中学校と、東中学校の空撮。3.5ヘクタール、4.2ヘクタール、5.5ヘクタール。ほとんど中学校が空撮を見ますと、校舎とプールと体育館と職員用の駐車場を省いたら運動場なんですよ。それで、竹尾緑地が3.2か3.5とってあったとしても、それで校舎と運動場と職員駐車場、体育館を省いたところが全て運動場に、つまり、運動場にならないと、6年生ももってくるからなおさらでございます。運動場がすごく重要です。そして、併せて言います、手光わかたけ案につきましても、運動場は狭い、これは私はまず学校を設置するのに、安全で予算面も確実に、この予算の範囲内で行われ、なおかつ持続可能性のあるつまり児童数の推移で激減しない、歴史をつくれる、そういう適正な場所は、竹尾緑地なのか、手光わかたけなのかということでございます。今のままでは運動場が狭い。ただ、小学生こそ、運動場も含めて小学生、僕も思い出します、秘密基地を作ったり、虫取りに行ったり、そういう環境はむしろ手光わかたけのほうが小学校ならなおさらあると。

中学生は環境教育は本当にやっていただきたいけど、やはり、勉強、部活、塾様々、小学生に比べれば静的であります。小学校が、私の認識でも、今皆様が中学校と言われたけど、6か月前は小学校は今のままだと、運動場が狭いまあと何年間推移するんですかね。僕は南小学校と福間小学校を比べてみますけども、大規模校化は南小学校のほうが進んでいるけども、福間小学校は校舎の中の配置や運動場の広さを見て、過密感が高いのは福間小と思っています。つまりその定義上の過大規模校、しっかり行政なので見る必要があるけれども、この校舎や運動場とのバランス、増築増築して教職員室をつなげてなんていうところは、本当に手狭な教員の体制。まず急ぐべきは小学校だと思っています。小学校が今もう現実に過大規模校なんだから、そして、私が言ったように、小学校は3年でできませんかと言っております。

竹尾緑地の懸念は、今日はあえてあまり申し上げませんでした。事業費のことがまだ定まらないので、予算化できない。安全面、そして、本当にできた場合、市民の皆様に御理解いただいて、それなら竹尾でいきましょうと、ここにこれから50年、100年続く学校ができるんだねと、地元の人にこそ喜んでもらって、ここに配置する。そこには教育的な、効果の面はしっかり教育行政の専門家として行政として説明する必要があるけれども、市民の皆様をどう理解させていただくかというこ

とがこの場だけでは決まらないことです。はっきり申し上げまして。だから、市民意向調査をやるんです。どっちがよいかというのは最終的にはまたこの場に、この場になってくるけど、ここに市民の声を反映させるのがこれからやります市民意向調査。行政がやることは、安全面をできるだけ確保するために、土木費や、災害対策費を使って、竹尾緑地の安全面を確認していくことです。そういうことになってまいりまして、そして、まあそんなこと。その中で教育効果、この教育効果がやっぱり過大規模校はとても担えないということ、だから、1,600人ということは、ちょっと下方修正する必要がある、下方修正になってくるんじゃないかということは踏まえていただきたい。福間中学校については。

その中で、仮に1,500人規模でも本当に大規模校なので、子どもたちにとって、また現場の教職員の方にとって、不便でない環境というのは考えなきゃいけないと思っています。そして、わかたけであった場合は、その今ある、そのわかたけの範囲内だけで運動場は狭いと、勝浦や上西郷の運動場における、もちろんこのエリアは、私の中でもさっきもちらっと言いました。今度は福津消防署も来ますね。そして、ふくとびあ、「フクスタ」はもっと展開させなきゃいけない。

そして、竹尾緑地に学校をつくる場合であっても、中央公民館はスクラップしないと、竹尾緑地には学校ができない、ここは本当にこれは財政当局ではないけど、どうやってこの中央公民館を市民の皆様に納得させる形で役割を変えていくかということもすごく重要なんですよ。そして、委員さんがおっしゃるように、中学校も含めてということになりましたら、そこは検討しなければいけない、手光の地であっても、しかし、急ぐべきは小学校でございます。中学校は令和6年に教室が足りなくなります。今から取り壊し、9月か10月か11月ぐらいから建設が始まります。福間中学校が建設が始まり、令和4年の秋までにはできるんですけども、その1年半後にはもう教室が足りなくなるんですよ。

ただ、文科省の補助金の規定で、これ以上大きな中学校は配置できないんです。補助金を取ろうと思ったらね。

ですけども、令和6年、令和7年、令和8年ぐらいは確かに二重投資と言われるかもしれませんけども、一気に1,800人、1,900人になるわけじゃないんですよ。今過大規模校がどんどん進んでいるのは、福間小と南小なんです。これを、しかも、わかりやすく目に見える形で解消するには、このやり方がありますということは、最終的には教育委員会の申出をもってまた予算を考えていくんですけども、もうこういう考え方もあるんですよということを、今市民の皆様にも提示して、教育委員の皆様にもお知らせさせていただいているところです。

あとは、一小一中のメリットを強調された委員の方もおられました。一小一中に対しては、私が今回の手光わかたけ案はある意味カウンターパートというか、そうじゃない考えもあるんじゃないかと申し上げさせていただいたところです。

子どもたちにとって、子どもたちが気がつかないうちに、いつの間にか主体性をどんどん身につけていきます。体の発育と同時に。別れもあるけれども、新たな出会い、高校になって新しい、いやいや1年生から9年生まで全く変わらない環境で育つ場合と、いろいろあるけれども、新たな出会いがある中で、よりその自分の住んでいる校区のエリアだけのことしか知らない可能性が高い、ほかのよその校区の子とも交わり合える、交流し合える、そんな展開がインフルエンサーという言葉を使いましたけれども、小学校を配置することで考えられないかと、ただこれ予算面で、わざとこの小学校と言ったのは、手光の地に小学校を配置した場合と、小中学校を配置した場合は全然教育観が変わってくるからです。ここつまり、手光の地に小中一貫、そのお金のことで、はらわれないでいただきたい。手光の地に小中一貫をつくった場合と、手光の地に小学校だけをつくった場合は、全然内容が変わりますので、私の考えか、それとも手光の地にこそ小中一貫をつくると、一小一中でございませぬ。ここをどう考えるかをぜひ考えていただきたい。

それから、小中一貫ということで、5-4制もある、4-3-2制もある、6-3制もある、ここちょっと本当に確認しなければいけないのは、宗像市がやっている4-3-2制も、別に校舎は6年生と3年生ですよ。その中で4-3-2制が行われていますよね。私が言っているのは、だから、ここは今日傍聴の方も、5-4制であっても、6年生と3年生の校舎の配置で5-4制をやることは、ありどころが、そっちが先。5年生までを一くくりとした評価の仕組みと、6年生から中3を一つにしたそういう教育プログラムです。何も4-3-2制といって、4年生までの校舎が1つ、3学年の校舎が1つ、2学年の校舎が1つあるわけではないです。私が危惧しますのは、中1ギャップがあり、もっと小学校高学年に教科担任を取り入れるというのは、それは大賛成。ですけども、つまり教科のプログラムとしては、5-4制は進める価値はあるし、進めるならば福津市全体の教育基本計画の中で打ち上げるべきだと私は思う。その中で、つまり校舎、その中でただ一方で危惧するのが、教える側が先生、教えられる側は子どもの、その教科の中のちょっと狭過ぎるかもしれないけれども、この5-4制ではなく、その一方で情操教育であったり、生徒会活動であったり、学校運営、つまり上級生になるにつれて、今のところ6年生目がけて、6年生が主体で生徒会活動や運動会や文化祭の運営のリーダーは、全てほぼ6年生でやっている。そして、こ

の6年生が1年間のほとんどはもう中学生と一緒に暮らして、中学生と一緒に学ぶことのメリットもあるけれども、果たして情操の中で、6年生が最上級生として位置づけられ卒業式を迎えたときに、5年生が6年生に今まで本当に御世話になりましたと、これから自分たちが最上級生ですと、6年生を今しっかり先輩を見習って下級生をまとめていきますので、6年生の皆さん今度は中学校に上がって頑張られてください。それで6年生のほうが今度答辞のほうで、特に5年生頑張ってくれという、あの日本ならではのセレモニーが卒業式である中で、こういうことの懸念でございます。つまり、その中1ギャップというのは、中1ギャップは施設分離型の5-4制を、とにかく中1ギャップというのはなくしていかなければいけないことが本当に重要。ですけれども、5-4制はとにかく全て教育のプログラムであって、ただそこには生活や情操教育や生徒会活動や学校運営、行事の運営がある中で、6年生がいつもというかほとんどというか98%ぐらい小学校にはいない中で、どうやって、その特に小学校の先生の側がどっちに最上級生をもって、それはやれといわれたら必ずやるんだけど、その最上級生が6年生なのか5年生なのかこう分からない制度にならないかと、でも5-4制であっても、6年生までがいて、中1から中3までがいて、この小学校5年生と一緒に生活している6年生がいろんな中学につながるプログラムを学ぶことは重要なんですよ。だから、5-4制は別に僕は反対はしていませんけれども、いつまでもこの大規模校解消のために、福間小と福間南小は6年生が中学校に行って、しかも施設は隣接していないので、離れています。南小と竹尾中も、福間小と福間中もね。日の里で4-3-2制が行われている。日の里西小、日の里中、日の里東小、とありますけれども、施設が隣接している小学校と中学校は本当に小中一貫を行いやすい。しかし、ちょっとでも離れていると、また全然移動のこともあるけれども、本当に難しい。そんな課題もある中で、決して竹尾中と南小は近いわけじゃない。福間小と福間中も結構離れている中で、その6年生の位置づけ、そういうところを本当に現実の頭の想像の中で考えていただくことを希望いたします。リーダーという言葉が出てきました。これは今村委員でしたかね。リーダーが今のところ6年生です。そして、5-4制になってもリーダーは6年生とおっしゃいました。今のままのほうが6年生、リーダーが育ちやすいのか、5-4制の場合の方が、リーダーの在り方並びにより育ちやすいのかをしっかりと考える必要があると思います。

それから、もう一つ広げていくと課外活動です。だから、6年生が中学生と学ぶ、中学生とともに学ぶ課外活動をする利点は幾らでもあります。しかし、もちろん6年生と一緒に例えば

野球をやったとして、中体連に出れるわけじゃないので、やはり6年生は、日蔭野の子どもであったら、南小学校の体育館に来て南小のミニバスケットボールの中で大会に出るんですよ。本当にこのそういうところは容易に想像できる中で、皆さんの思いだったと思いますが、真剣に5-4制がよいと、この場になって、これしかないんだ、仕方がないんだという議論は、お互いその夢を語りましょう。これをやっていって将来どのように市が、子どもの環境がよりよくなっていくのか、ここであえて聞きたいのは、時々出てくるように、本当は小学校2校、中学校1校あったほうがよいと言われますが、小学校2校、中学校1校を配置した場合の案を見るべきだと思う。本当は。本当はこっちのほうがよいけども、これしかない、仕方がないんだで、この竹尾中学校の5-4制に落ち着いてきて、そこには、教育部、教育委員会の御苦慮があるんだけども、かといって別の案が出てきたら、そちらがほとんどデメリットで5-4制というか、竹尾の中学校がこれしかないんじゃないかと、これが一番やっぱり未来を語らないといけないから教育行政というのは、そういうところで本当に本音のところがお聞きしたいんです。手光わかたけでやったら運動場が狭いとかいうのは、本当にある意味、申し訳ございません、さまつな議論でございます。どっちに配置したら、もう一度言います、安全で予算面も確実に執行でき、そして、持続可能な学校にできるのか、そして、今まさに中学校のほうが重要だと思う。小学校が重要だと思う。ここは議論がかみ合わないかもしれないけれども、先を見なければいけない。現実今本当に泣いてらっしゃる、不安でおられる方は、小学校の保護者です。これから小学校に入れる保護者のほうがある意味心配されている。中学校はまだ見えてない。見えていないけれども、それは想像される中で、少しタイムスパンがある。その令和10年か、令和9年までに、もし中学校が配置できれば、過大も解消するかもしれませんが、もう今の段階で早く学校を設置し、そこでその竹尾に設置しようとした場合に、こちらは教育部がいろいろ言い分はある中で、どういうことなんだということで、なかなかその市民からの懸念もあるわけです。それで、私に対しても、予算をつけられない理由は言うんだけども、これだけ苦慮していて、本当にだからこそ、このあともう一回再質問をお受けしたいんですけども、教育委員さんの中で、手光に小学校と小中学校を配置した場合、皆様は行政職の御出身ではないし、教職員の専門であられるので、ちょっと本当にその予算面のことは少しおいておいて、こういう教育環境がよいんじゃないかとかを、どうしても教育部のほうは教育委員会の事務局ですけども、その予算面を含めて時間がないので、このいろんな案を提案してくると思うけれども、これからの福津市にとって何が、子どもたちにとつ

て、しかも子どもが主体になるような教育環境とは何なんだということですね。考えていただきたいし、CSは発展期、計画の上ですね。しかも、評価されています。しかし、私も申し上げましたように、宮司の課題とか、見過ごしちゃいけません。学校に行けば、学校運営協議会の中にそれぞれの郷づくりが入っていますけども、10年後、20年後の新たな郷づくりやコミュニティの担い手や、地域とともにある学校や、学校を核とした地域が、今のままでは崩壊する可能性もはらんでいるということを見ていただきたいんです。そして、皆様には今日は多くの市民の皆様が傍聴されているはずですけども、市長の声も、話も聞きたいと、教育長を始め、教育委員の話も聞きたいと、もう今なっています。ぜひとも市民の皆さんの場に出て行かれて、皆様は本当に法律に位置づけられた重要なポストなんですよ。ここがあるからこそ教育行政は市長部局とは独立しているんですから、今述べられたこと、本当に市民の前で語っていただくことを切に希望いたします。そうして、内部だけでなく、そうやって皆さん本当に市民の一人であられますし、教育に携われた皆様なので、市民の声も本当に生で、市民の声って皆様がそもそもPTAであったり、先生であったり、地域に普段からたくさん関わられている方だけど、そういうことを今後行っていただきたいと。

それから、具体的にぼっと思い出しました。そうです、神興、神東ですね、これは思いの中で決して消しているわけではございません。ちょっと言いましたように、近代明治になりました、義務教育、中学校も全然今の戦後の6-3制とは違いました、まず小学校が配置されます。ですので、福津市にも勝浦小学校、上西郷小学校、福間小学校、神興小学校は140年以上の歴史があります。これ全部かつての村に、神興村、上西郷村、勝浦村、福間村、下西郷村にも学校が配置されました。そして、その定義上1,000人以上が過大規模校、100人以下が小規模校とか、いろいろあって、そういうことになってきて、これぐらいの児童数になったら廃校してもよいですよみたいな指針は一方であるんですけども、この歴史を重んじなきゃいけないし、地域の方の思いも重んじなきゃいけないし、様々な視点から統廃合を見ていく必要があります。しかも、次から次に建てられない中で、やはり一つつくるならば、学校も含めたところの中長期的な学校施設等のプランを、恐れることなく教育委員会こそが出さなきゃいけないです。竹尾緑地案が決まらないとそれも出せないではないんですよ。可能性として、こういう統廃合の案はあるということもやはり出して行くべきです。そのための3,100万のコンサル料なんです。

私は今後、統廃合が、一番スムーズに行くのではないかと思う所は、勝浦小や上西郷小ではなく、もともと神興に1つあっ

て、神興小学校ができ、東福間団地の開発が昭和30年代から始まり、神興小学校は東福間団地の上の地に移転し、しかし、若木台団地は昭和40年代後半から開始されたので、かつて神興小学校があった地に神興東小学校が設置され、どちらも安部清美先生のことを謳い、安部清美先生の教えを一番この子どもたちの教育にも生かしているこの神興小と神興東小学校というのは、歴史も似たような歴史と、やっぱり切磋琢磨頑張っているところもあるので、ここは児童数が本当に激減した場合や、本当に校舎の建て替えが必要となったときに統合しやすい可能性があるんじゃないかということ、私は勇気をもって述べたんです。

しかも、光陽台の4、5、6というところが、そもそも小学校1年生が通うには40分ぐらい登校時間がかかって、途中で地域の方がトイレとか準備している、そういう取組もあります。そういう中で、光陽台4、5、6は手光の小学校のほうがやはり、これから光陽台4、5、6も新しい方がどんどん入って来られるでしょう。入って来られる場合に、そこに学校があったほうが、また入って来られやすいとも思いますし、そうなりますと、神興小学校の児童数がいったん減りますので、今のうちからそういうことも教育委員さんの中でも検討いただく必要があると、そのように思った中で、私はその学校建設によせての中で、書かせていただきました。あとは、郷づくりとの関係も今は円満という言葉もありましたけれども、いやいやだから今が円満でない状況もありますし、あまり今日は竹尾案の懸念事項は言わないと思ったんですけども、青木委員のその、これから手光は今のところ全く宅地化される予定はないです。ただし言いましたように、光陽台4、5、6、大和町1区、2区、光陽台の1、2、3と四角区、そして、宮司、この様々なこの人口の流動が複雑化している、そういうエリアに囲まれている手光ですので、児童数が激減しないということ言ったまででございます。それからその、コンサルの評価の中では、周りが住宅地に囲まれた竹尾緑地の評価が高いんですけども、もちろんこれは細かいけども、危険なことでは省きまして、文科省の指針によりますと、近くに遊興施設があるところには学校は設置しないほうがよいとある中で、既にイオンモールの中にゲームセンターが配置されていまして、そこが配置されている中でどういうふうにクリアしながら、竹尾緑地に学校をつくっていくかということも少しその事務局にも聞かれて勉強されたほうが。厳密にいけますと、ゲームセンターを持っていたら学校は配置できない。学校を配置したら、ゲームセンターを廃止してもらわなきゃいけません。それから、中学校ですので中学生にとって本当にイオンモールの隣がよい環境なのか、それとも少し周りは何も人里離れて自然と田畑がありますけど

も、市街地の中心に近いこの手光わかたけ地のほうが、学校の設置に適した場所なのか、私が考えていただきたいのは、どちらが、とにかく学校をつくるとしたら、どちらが適地なのかと、その中で中学校の問題も出てくるかもしれません。ただ、小学校をつくる場合と、小中学校をつくる場合じゃ全然変わってまいりますし、私は予算の面も見ていかなきゃいけません。だから、竹尾のほうも少しく今保留しているのは、市長部局のほうで判断できるところは予算も計上いたしまして、安全面や、特に土壌調査等をこれから行っていこうと思います。

大体のところはそういうことでございます。

榊参事：それでは、かなり時間が超過してしまいましたので、お話は尽きないかと思いますが、会場の都合もございまして、まとめとして教育長にお話いただいて、この場を、まだ多分いろいろお話しされたいことはあると思いますが、まとめさせていただきたいと思います。

よろしく申し上げます。

柴田教育長：教育委員会柴田でございまして。

市長、今日は総合教育会議準備していただいて本当にありがとうございます。

この総合教育会議というのは、地方公共団体の長と教育委員会の十分な意思疎通を図り、地域の教育課題やあるべき姿を共有して、幅広く意見交換するという協議、調整の場だというふうに受け止めております。時間が来ましたので、これはまとめにならず、継続ということになるかもしれませんが、教育委員会としましては、やはり過大規模校の解決に向けて教育の質を維持しながらも、効果をさらに高めるために財源、スピード感、場所、場所については安全性あるいは環境との共生、そういったことを総合的に判断し、そしてなおかつ、通学区域審議会の答申、あるいは教育懇話会の答申、教育懇話会の答申は後で出たものですが、そういったことを踏まえて、新設校の建設に向けて進めているところでございます。

竹尾案というのを提案させていただいたら、市長のほうから、今、凍結保留ということで再考しなさいということで、再考しているところでございますが、効果面からすれば、私はこれからの時代の教育、これからの時代というのは、Society 5.0の時代、あるいはSDGs未来都市、あるいはコロナの感染もありますが、非常に先行きが不透明、しかも多様な価値観が求められる、そういった時代に、子どもたちが何を知っているかよりも、何ができるか、あるいは豊かな感性、あるいは新たな価値観を生み出す力、あるいは困難やジレンマに打ち勝つ力、あるいは他者と協力して粘り強く何かを創造する力、そういったことが求められているんですけども、これは、教室、学校の教師と教科書だけで、なし得ることはありません。

ん。多様な体験、多くの人との関わり合い、これが必要になってくるわけです。ですから、その中で本市は、コミュニティ・スクールといって、学校と保護者と、そして、地域と教育行政この4者が四輪駆動となって、子どもを上に乗っけて支えていく、あるいは育てていくというシステムを平成19年、私が勤務したのが20年から25年まで福間中に御世話になりましたけど、23年には全小中学校でコミュニティ・スクールを導入したわけです。これは国でも新しい時代に生きる子どもを育てるには学校だけの力では不十分だということでコミュニティ・スクールを推奨していきまして、現在では、全国小中学校1万8,000校ぐらいあるんですけども、3,000校を目標に国はいていたんですが、今既に7,600校を超えているということで、やはり全国的にこのコミュニティ・スクールというのは推奨されているシステムであると思っています。

そして、併せて9年間の連続性がある教育をなささいということです。ですから、そういったところを総合的に考えると、校区再編成が伴わなくて、小学校、中学校と、先生方がコミュニケーションが取りやすい、あるいは地域の方も地域の小学生だけ見ているわけではありません。中学生も見ているわけですね、家は変わらないわけですから。だから、地域の方も小中連続的に子どもたちの成長に関わっていただきたいということで、小中一貫教育を目指しているわけですね。ですから、教育委員会としては、できるだけ分割校というのは避けたいと思っています。分割校というのは、小学校から複数の中学校に分かれて進むと、市長がおっしゃるように多様な出会いがあって、それはそれで一つだと思えますけども、今、福津市は、中学校単位として校区の小学校と共通した目指す子ども像、あるいは目指す教育の在り方というのを共有して、子どもたちを9年間の長いスパンで育てていこうという動きを取っているわけです。ですから、これは持続したいということを考えています。ですから、手光に小学校をつくっていただくのは非常にありがたいんですけども、3中学校に分割して行くというのは、小学校の先生たちから見れば、それぞれ3つの中学校のカリキュラムとすり合わせをしながら子どもたちを育てていくという面で、少しエネルギーがいるかなというふうに思っています。

そんな様々な思いと課題がありまして、今後も市長とは、このことについては、時間を何時間でもさいて歩み寄りを図りたい、協議をさせていただきたいというふうに思っていますので、またこういう機会を作っていただければと思っています。

ただ、私も教育に40年ほど関わってきましたけども、子育てと教育というのは共通したものがあまして、先を見通すというのは非常に難しい、こうあってほしいという願いはあっても、やはり仮説を立てたり、あるいは模索をしたり、試行錯誤

をしたり、仮定の中で葛藤をしたり、迷いがあったりとか、非常に先行きを見通すというのは難しい分野だと思っています。その中でやはり子どもへの愛情だとか、情熱、あるいは他に学ぶ謙虚さとか、あるいはここに身を置いている使命感、そういったことを忘れず、教育行政に関わっていければというふうに思っています。

そういったところでまとめになりませんが、今日は本当にありがとうございました。

榊参事：それでは、今日は市長と教育長、あと教育委員の皆さんの新設校に向けた思いを語っていただく場となりました。

傍聴者の皆様にも、皆さんの思いを聞いていただけたかと思えます。

申し訳ございません。予定よりもかなり超過してしまいましたが、またこの件については協議を今後続けていくということで以上をもちまして。

4 その他

市長：ちょっとすみません。

今日、皆様にちょっと強いことや失礼なことも申し上げたこともあったかと思えます。そこはどうかまた発言の訂正とかがあれば聞きたいと思えます。ただ本当に、今市民が本当にこの総合教育会議を注視しています。ということは間違いありません。総合教育会議を、今日も。そして、この総合教育会議というのは法律に則らされて、公開を原則とする総合教育会議なんです。そういうことを想定されて、もしかしたら教育委員会に拜命をされたわけではないかもしれませんが、もう今本当に私にとっても大変ですけども、本当にありがたいこの機会、並びに今の時期に私も市長としてあります。教育委員さんもあります。ここは本当に、教育委員さんも合議制ですけども、それぞれの教育委員さんの考えを市民も知りたいと思っているし、そもそもまずはこの総合教育会議で皆様の発言がどのようなものであるかをも、今日は平日ですけども、本当に知りたい、会議録が公開されたらすぐ見たいと思っている市民の方もたくさんおられるでしょう。その中で、今日は全くまだ内部的に、ただ技術的には可能、並びにまた法的にも可能ということで全国で先駆けて幾つもの自治体がこの総合教育会議というのは、この総合教育会議でやる案件というのは議会にはそぐわないんですよ。なので、その総合教育会議じゃないと話せない案件というのはあるんです。こういう学校の設置のこととか。こういうことは、議会と同じぐらい、もう公開が原則と謳われた議会よりもより強い強制力を持って法律に謳われた総合教育会議でありますので、しかもコロナの御時世。本当は傍聴人はお控えい

ただかなきゃいけないまだ御時世です。家においても総合教育会議がパソコンをいじれば、操作すれば見れると、そして、肖像権や悪用の恐れもありますけども、そもそもが皆様そういう重責でありまして、何か一般の方が写っているわけじゃない。この総合教育会議というものを全国のいろんな自治体が、この歴史はまだ浅いんですけども、公開、ネット配信もしているということで、ここは次回の教育委員会のときでよろしいので、私からのオーダーといたしまして、やはり法制上問題なしに、技術的にも問題ない中で、今後この議題はやはり最低あと1回、2回は続いていくと思われる中で、このネット配信、録画中継はするかどうかは別として、本当にできるだけまだコロナ禍なので、傍聴の密度を避け、家においても傍聴ができるという、そういう環境を整備する必要があるかと思う中で、私からの提案というか、今日はこれは内部で整えたものですけど、ちょっとお配りして、次回の教育委員会の中で御検討いただければと思います。

それから、最後に次回の総合教育会議の日程はここでは定めることはできませんが、この総合教育会議というのは、ふつうの予定でいきますと10月か11月です。ただ、9月議会もまいります。また、今日の総合教育会議を経て、それは私もお願いしましたが、教育委員さんの中でまた今日言い足りなかったことや、私のやったことをもしかしたら再考いただくことも想定しながら、次期の総合教育会議というのを、これは市長が招集するので、市長部局で教育委員会のほうに、こうちょっとオーダーをかけていこうと思っておりますが、令和2年度第2回の総合教育会議をできるだけ予定どおりではなく、なかなか来月は難しいかもしれませんが、少なくとも2か月後ぐらいには開く必要があるんじゃないかということは、今私としては思っております。それまでに、それぞれ教育委員さんのほうでも進めなきゃいけない手続、プロセス、私のほうでも、市民意向調査だけでなく、そういう環境面での調査並びに議会対応等ある中で、庁議もあります、そうやってしっかり連絡調整、連携を取っていきながら、教育委員の皆様と私のほうでこの案件を解決に向けて進めていく、そのことを気持ちを新たにすることとか、改めて気を引き締める、そういう会議の場であったことを、あつたはずだということを申し上げさせていただきまして、今日の総合教育会議を終わらせていただければと思います。

本当に今日はありがとうございました。

5 閉会の宣言

榎参事：では、時期等も含めて、また検討させていただきたいと思いま

すが、以上をもちまして令和2年度第1回総合教育会議を終了
させていただきます。

また、次回の日程が決まりましたら、改めて御案内をいたし
ますので、よろしく願いいたします。

本日は、どうもありがとうございました。